心の歌を奏でて

―序章―　①

芳田尚哉

「家出娘を連れてきました」
　トオルは勢いよく引き戸を開けた。ガラガラという音が響く。
「ちょ、ちょっと……」
　トオルに首根っこを掴まれたキヨカがじたばたと暴れるが、トオルから逃れる事はできない。
　しんと静まり返り、外を歩いていても人と出会う事がほとんどないこの逢稀(あき)村の中で、今この場所が唯一音がある場所だといっても過言ではない。
　だからこそ、この二人の声はよく通った。
「じいさん……。いないんっすか？」
　常に誰かがいるこの遠野(とおの)家だ。少なくとも当主の心貞(きよさだ)――もっとも、いつもじいさんと呼んでいるので本名を忘れる事しばしばだが――はいるはずだと、トオルはもう一度呼びかける。
「おい、じいさん……」
「ちょっと、トールちゃん……」
　キヨカは暴れるのをやめ、今度は心配そうにトオルを見る。その目は、やめておいた方がいいよ、と言っている。
　しかし、そんな心配をよそに、トオルはもう一度叫ぶ。
「おい、じいさん！」
　と、その時――
　シュンと空を切る音がした。
（……きたっ！）
　トオルは気配の方に向けて、首根っこを掴んだキヨカを突き出す。
（うぞっ！）
　思いもよらないトオルの行動に、キヨカは一瞬だけ思考が飛んだ。
　パシャン！　という音が玄関先に響いた。
「あいたっ！」
「……ってぇ！」
　キヨカはしりもちをついてしまい、お尻をさすりながら涙目だ。音と同時に地面に落とされてしまったのだ。
　そして、キヨカを掴んでいたはずのトオルはといえば……手首を押さえてうずくまっている。
「……愚か者が」
　そんな二人を見下ろすように、小柄な老人が竹刀を持って直立していた。長い顎(あご)髭(ひげ)を撫でながら満足そうにしている。
「おじいちゃん……」
　キヨカはお尻をさすりながらその老人――遠野心貞を見上げる。

　その目には涙が溜まっており、うるうるしている。
「やっと帰ってきたか、我が愛孫(まなまご)よ」
　心貞はしゃがみこんでキヨカをむぎゅっと抱きしめた。
「心配したんじゃぞ。どこぞの莫迦(ばか)弟子のとこに行ってからに。もしお前が獣(けだもの)同然のあの莫迦弟子にあんな事やこんな事やそんな事をされてしまったらと……わしは心配で心配で夜しか眠れんかったんじゃぞ」
　勢いに任せて捲(まく)し立てる心貞にキヨカは抱きしめられるままになっている。
「うーさい、エロじじい！　誰が莫迦弟子だ！」
　トオルは手首をさすりながら叫ぶ。
　ツッコミたいところは他にもあるが、それよりも言いたい事がある。
「だいたいな、本気で叩くな！　折れるだろうが！」
「そうだな……竹刀が折れてしまうか。いや、莫迦ごときに負けるようなヤワな竹刀ではないか。だがそうだな……わかった。次からは木刀にしよう」
　心貞はキヨカをハグしたまま冷静に答える。
「……くそじじいめ」
　――パシャン！
　と、心貞の竹刀がトオルの脳天を直撃した。
「……ってぇ」
　手の痛みを忘れ、両手で頭を押さえる。
「なにしやがる！」
「悪い悪い。次からは木刀だったな。それよりも真剣の方がいいのかのぅ」
　心貞はキヨカを抱擁したまま、しれっと言ってのける。
「殺す気か」
「そんなつもりは毛頭ないぞ。ただ、わしの愛孫に寄ってくる悪い虫を懲(こ)らしめただけじゃ。はっはっはっ！」
　心貞はキヨカをむぎゅむぎゅしたまま豪快に笑う。
「おじいちゃん……ちょっと苦しい……よ」
　心貞の腕の中で、キヨカはふがふがと藻掻く。
「なに、苦しいとな。これは一大事じゃ！　あの莫迦弟子になにかされたのか」
「あの……」
　と、キヨカがなにかを言う前に、
　――パシャン！
　と、再び竹刀がトオルの脳天を直撃した。
「……ったぁ～」
　トオルが呻いたのと、心貞がキヨカを抱えて家の中に駆けていったのは同時だった。

強制的に布団に寝かされたキヨカは、なんとか心貞に苦しかった理由を告げ、無実なのに散々叩かれたトオルもなんとか家の中に入れてもらう事ができた。

トオルはそれからもぶつぶつと文句を言っていたが、心貞は既に眼中にないようで無視し続けている。その対応には既に慣れっこなトオルなのだが、久しぶりだと妙に苛立つもので、この無常な対応が今さらながらムカツク。

しかし、どうしたところで心貞に敵うはずもなく、返り討ちにされるのがオチだ。

ここは我慢だ……。

と、心の中で何度も何度も唱える。

隙を見つけて――殺(や)る！

いつか必ず！

(C)2012 STUDIO SAIX All Rights Reserved.

　さて、どうして俺はこんなとこを歩いているのだろうか。
　よくわからないうちに外に連れてこられたと思ったら、こうして村を散策している。そういや、舗装されていない地面が剥き出しの地面なんて久しぶりに見たよ。今じゃ、どこもかしこもアスファルトで舗装されて、本物の地面なんて見る事なかったもんな……。
　いやいや、黄昏ている場合じゃない。
「あのなぁ！　耳元で大声出すなっての」
　キンキンと痛む耳を押さえながらぼやく。
　せっかく故郷に戻ってきたというのに、竹刀で手首を打たれるわ、脳天にも二発くらわされるは、手刀でのされるは、さらには耳元で叫ばれる……。
　なんかの厄日か？
　闇黒期とか大殺界とかそんなんか？　占いに興味ないからよくわからんが……。
　とにかく、不運だというのは間違いないようだ。
　それにしても耳が痛い。
　キーン！　という音がしていて、他の音が聞こえない。
　おいおい、鼓膜が破れてたらシャレにならんぞ。
「ーーーーーーーーーー(トールちゃんが起きないのが悪いんだよ)」
　キヨカがなにか言ってるが聞こえないし……。しかも、なんかご機嫌斜めだぞ。
　……って、マジで鼓膜が……がぼーん！
　どうすんだよ。
　このまま耳が聞こえなくなったりしたら……。いや待て。確か鼓膜って再生するんじゃなかったか？　なんか、そんな事を聞いた事があるようなないような……。ちきしょー……ちゃんとそういう豆知識は聞いておくんだった。こんな田舎に医学辞書はないし、図書館なんてあるわけないし、医者もないときてる。……って、医者いないんだよ。よくよく考えれば無医村だよ、ここ。どうしてだよ。この村、老人しか残ってないだろ。若者なんてほとんど見ないぞ。みんな隣の栄琉(はる)市に住んでるからな……。俺の実家も今じゃ栄琉にあるからな……。過疎の村だよ。そのうち誰もいなくなっちまうんじゃないか。そういや、山を一つ越えたとこにもなんとかって村があったような……。もう、誰もいないらしいけど。おいおい、ここもそういう運命なのか？
　……いやいや、今は村の心配よりも俺の耳だ。
　耳鳴りがまだおさまらない。
　キヨカの声って元々大きいからな……。それで叫んだら立派な凶器だと思うわけだ。
「なあ、どこ行く気だ？」
　と、思わず疑問を口にしてから、しまった……と後悔した。
「ーーーーーー(別に行き先なんてないよ)。ーーーーーー(ただのおさんぽだもん)」
　案の定だ。

なにを言ってるか聞こえない。
読唇術なんてできないしな……。
どうしたもんか。
レッツ・シンキング・ターイム！
……う～ん。……う～ん。……う～ん。
……☆
とりあえず手頃な石を探して……っと。
そうだよ。人間には言葉以外に文字というものがあるのだよ。
そしてここは舗装された道じゃなくて剥き出しの地面。
さすがだ、俺。よくやったぞ、俺。
とにかく、今の状況をキヨカに伝えておこう。

〝お前の大声のせいで耳が聞こえない〟

「ふがっ！」
キヨカに手を踏まれた。
「ーーーーーーーー(起きなかったトールちゃんが悪い)。ーーーーーーーー(私のせいにしないでよね)。ーーーーーーーーーー(そんなの気合でなんとかしなさいよ)」
なんだかご立腹のようだが、俺には聞こえない。
だいたい、聞こえないって伝えてるのに……。
普段は温厚なくせに、拗ねたらこうだもんな。
しかし、どうしたものか。聞こえないと伝えたにもかかわらず喋りかけてくるとは……。

〝聞こえないんだから、文字で頼む〟

もう一度チャレンジ。
「ーー(面倒)」
なんか言ったようだが……。って、だから聞こえないんだってばさ。
……もういいよ。
諦めた。
全てを委ねた。
どうとでもなるさ。
どうとでもなれってんだ。
なるようにしかならないんさ！
仕方あるまい。このままキヨカが思うようにしておくしかない。
それに、徐々にだが音が戻ってきた。どうやら鼓膜は無事だったらしい。頑張ったぞ、俺の鼓膜。よく耐えた。ヴィヴァ・マイ・コマ～ク。

(C)2012 STUDIO SAIX All Rights Reserved.

　とにかく、キヨカに言われるままについていく。
　それにしても、ここを歩くのはどれくらいぶりだろうか。そもそも、この村に来たのはいつ以来だろう？　なんだかとても遠い過去のように思える……と、少し感慨に耽(ふけ)ってみるが、実際は五、六年ほどだろう。でも、それも俺にとっては結構な過去になるわけです、はい。
　誰も通らない道。でも、どうしてだか淋しさはあまり感じない。
　都会とは違って剥き出しの本物の地面は、歩いているだけでなんだか楽しくなってくる。まるで、子どもの頃に戻ったようだ。まあ、今でも充分ガキなのかもしれないが、なんだか本当にあの頃に戻ったみたいだ。
　道の脇には畑があったり、案山子(かかし)が立っていたり、でっかい目玉の風船があったり。
　それが懐かしいと思えるのはどうしてだろう？　それほど、記憶に残っているはずもないのに。それって、本能的なものなんだろうか。国民的なものが、ＤＮＡレベルで刻まれてるとか？
　ここに住んでいたという記憶はないに等しい。田舎に遊びに来ていたって感覚だし。
　よくわからんが、とにかく懐かしいものは懐かしいって事さ。
　途中、小さな祠があった。六角形に対角線が引かれている変な紋様が彫られている。
　その小さな祠に、ぱむぱむと拍手(かしわで)を打って拝むキヨカ。思わず俺も倣(なら)ってしまう。
「なあ、これってなんの神様が祀られているんだ？」
　この土地で昔から信仰されている土地神でも祀られているかもしれないという、ちょっとここでこの村に来たもうひとつの目的を思い出して訊いてみる。家出娘のキヨカを連れてきて、いきなり竹刀をくらって……思わず忘れそうに――いや、実際忘れていたが、なんとか思い出せてよかった。そうだよな。一応、面目としては郷土研究って事になってるわけだし。
　で、少しだけではあるが、どんな答えが返ってくるのかわくわくしていたのだが――
「知らない」
「……」
　言葉ないね。
　まさかそんな返事がくるとは……。
「知らずに拝んでたのかよ」
「いいじゃない」
　即答。
　まあ、確かにそんなもんだよな。日本人ってそんなもんだよ。神道も仏教もその他の宗教も結構混同してるわけだし。だから別にわからずに拝んだっていいんだよな。なんかそれって相手に失礼な気もするけど、そういう国民という事にしておいてくれ。
「まあな」
　そう思ったのでとりあえず、素っ気無くはあるけど答えておく。
「それでよし」

　そんな俺の答えに、キヨカは何故か満面の笑みで満足そうに答える。
　これ以上考えると、なんだかそれはそれで負けのような気がしてきた。もうすでに負けている感はあるんだが、それがさらに顕著になる前にやめておこう。
　うん、それがいい。
「じゃあ、お散歩続けるよ」
　きっとそれは口にしただけで、俺の答えなどどうでもよかったんだろう。言いながらさくさくと歩き出す。
「……はいはい」
　仕方なく俺はキヨカについていく。
　ああ、まだ耳が少し痛いや。

　それにしても、長閑(のどか)だよな……。
　遠くの山は見事に視界を遮って、まるで陸の孤島のようだ。
　結構歩いたからどの山かはわからなくなったけど（地元民じゃないから区別できないって）、どれかの向こうには、そこそこ大きな街があるんだよな……。ホント、同じ陸続きとは思えない。
街の人間はこの村の存在自体知らない……なんて事ないよ、な。
……ありそうな気がしてきた。
　可能性はゼロじゃない。つうか、むしろかなりの確率っぽいぞ。
　俺はここには長期休暇のたびに来ていた――というか、来させられていたから知ってるけど。
　まあ、そんな事はどうでもいいけどね。誰が知ってようが知るまいが。
　そんな事を考えていると、
「ほら、目的地だよ」
　前を歩くキヨカの声にハッとなった。
　目の前には廃墟のようになってしまている平屋――俺が生まれた家があった。
　知らないうちに結構歩いていたらしい。そういや、耳の痛みもなくなった。ようやっと聞こえる。
　ったく……耳元でがなるなよな、とか愚痴を言う気分にはなれなかった。
「懐かしいなぁ……」
　思わず見上げる。
　文句をたれる気にはなれなかった。
　ばあちゃんが亡くなってから、ここに足を運ぶ事はなかった。もっとも、親の仕事の都合なんかもあって、すぐに栄琉(はる)市に引っ越したから。
　この村に来るのは、キヨカのじいさんに剣道を教えてもらいに来るくらいだった。その時も、わざわざここまで来るのは正直面倒だった。歩いて二〇分は、この村にしてみれば近いかもしれないが、基本的に街で生活していた俺からすれば遠い距離だ。
　なので、思い出らしい思い出はなかったりする。だけど、自然と懐かしいと思える。うん、

人間って不思議だねぇ。
「トールちゃん、いこ」
　キヨカが手を引っ張る。
　どうやら思い出に耽っている暇もないらしい。いや、耽るほどの思い出はないんだけど。
「どこ行くんだよ」
　いや、進行方向を考えればわかるわけだが念のために訊いておこう。
「決まってるじゃん、家の中」
　案の定だ。
　ええ、わかってましたとも。わかっていたともさ。
「お前な……それって、不法侵入じゃないかよ」
「どうしてよ」
　即答された。
　ちょっと思い留まらせようと思ったのだが、キヨカには糠(ぬか)に釘、暖簾(のれん)に腕押し、馬の耳に念仏、猫に小判、豚に真珠みたいなもんか。死んだ馬が屁をこくなんていう諺(ことわざ)が脳裏をよぎったね。
「どうしてもなにも、勝手に人の家に入るってのは、世間一般で考えても違法行為だろうが」
「どこがよ」
　また即答。
　……もう、言葉ないね。
「だーっ！　もう！　あのなぁ、なんでもいいから他人の家に勝手に上がりこむのは違法なの。ポリス沙汰なの。おロープ頂戴なの」
「いや、トールちゃんの言ってる意味がわからないから。なんとなくのニュアンスはわからなくもないけど」
「わかってくれよ」
　もう、どうすりゃいいのさ。
　キヨカって常識はあったと思うんだけどな……。
　いや、あまりないのか？
　そうだよな。よく考えれば、そうなんだよな。
　翌日に俺の家に来るって知らせを、その前日に葉書に書いて投函するようなヤツだもんな。ああ、俺が莫迦でした。こいつに期待してしまった俺の負けです。
　もう、止める必要もないような気がしてきた。
　この村なら大きな心で赦してくれるだろう。
「トールちゃん、莫迦？」
　唐突に言われた。
　いきなり莫迦ですよ。どうしろと？
「非常識なヤツに言われるのは心外だぞ」
「莫迦じゃん」

　即答だ。
　もう、口ではキヨカに勝てないのか？
「あのさぁ、ここってトールちゃんの家でしょ？　どこが違法なの？　本人いるのに」
　……はぃ？
　え、えっと……えっと……越冬ツバメ？
　いかんいかん、思考がパニックを。
　落ち着いて考えろ。
　よぉく考えろ。
　この目の前の平屋は誰の家だ？
　……俺のばあちゃんの家だ。
　……ん？
　つまり、俺の家って事でもいいのか？　住人の一人ではあるわけだし、そういう捉え方もありなのか？
　じゃあ、俺がいれば違法にはならない、と。ポリス沙汰にはならない、と。
　ならいいじゃん。
「わかった？　理解できた？」
　キヨカが勝ち誇った笑みで言ってくる。
　なんだ、この敗北感は。屈辱だ。
　最悪だ。ちきしょー！
「ああ、わかったよ」
「なら、よろしい」
　にっこりだ。
　だがしかし。
「だからって、どうしてここに入る必要があるんだ？」
　違法じゃないからって、入っていいというものでもないし、そもそも入る理由がわからない。
「探検、だよ☆」
　なんだ、この嬉しそうな笑みは。
語尾に〝☆〟なんて付いてるし。
　諦めるしかないのか？
　つうか、深く考えると負けなのか？
「……もう、なにも言うまい」
「それでよし☆」
　言葉ないね。
「さあ、れっつ・たんけ～ん☆」
　嬉しそうだ。ああ、これ以上ないってほどに。
　仕方ないか……。
　嬉々として中に入っていくキヨカのあとに続いて、生まれてからぶりのばあちゃんの家に入

った。

(C)2012 STUDIO SAIX All Rights Reserved.

　中に入ると予想よりは綺麗だった。多少は荒れているものの、いたずらで荒らされたという感じじゃない。自然に荒れたといったところか。
　それにしても、家って誰も生活していないとこうまでなってしまうものなんだな。
　住んでいる方がダメになってしまいそうだけど、そうでもないとは……。不思議なものだよな。使わない方がダメになるなんて……。
　確かに、人が住んでる家は呼吸している、とかそんな感じに言われたりするみたいだけど。不思議なもんだ。
　それにしても、いかにも日本家屋って感じだよな。
　上がり框(かまち)、三和土(たたき)に板張りの床に畳。あぁ、日本だなぁとしみじみ思う。
「トールちゃん、早く早く」
　俺の感慨をぶっ飛ばすキヨカ。
　おいおい、もうちょっと懐古気分に浸ろうぜ。いや、キヨカにそれを求めるのは酷か。
「あのなぁ、一応他人(ひと)ん家(ち)なんだからな。ちょっとは遠慮しろよ」
「どうして？」
　……即答ですか。しかも、満面の笑みで。
「だってさ、私とトールちゃんの仲じゃない。そんなの気にしない、気にしない」
「あのなぁ……親しき仲にも礼儀ありって……つうか、お前と俺の仲ってなんだよ」
　俺とキヨカは幼なじみではあるが、それ以上でもそれ以下でもない。
　まあ、世の中には〝幼なじみ〟という単語に妙に反応する人種がいるらしいが、俺はそういう事もないわけで。むしろ、幼なじみってのは面倒としか思えない。
　だいたいだな、知られたくないような過去や、忘れたい過去や、なかった事にしたい過去や、消えて欲しい過去なんかも全部知られてるんだぞ。まあ、逆に考えればこっちも知っているわけだが、それでもいい気はしない。むしろヤだ。
　憧れるのは勝手だが、妙な幻想を抱かれるのは御免被る。とにかく、変な幻想なんか抱かずに、現実を見ろってんだ。理想と現実は違うんだって事を知って欲しいね。
「照れない、照れない」
「照れてない！」
　テレリコ、テレリコしているキヨカをどうすればいい？　誰か助言してくれよ。
　なんだかドッと疲れる。
「えっと……なにを言おうとしたか忘れちゃったじゃない」
　と、今度はぷんすかしてやがるし。ホント、ころころと表情が変わるヤツだな……。百面相か、こいつは。
　しかも、なんか八つ当たりっぽいし。
「あのなぁ、お前がなにを言おうとしたのかなんて、知るわけないだろ」
「トールちゃんのいけずぅ」

「……」
　言葉ないね。
　いけずなんて言葉、久しぶりに聞いたよ。唇を尖らせて言われてもだな……やばっ、ちょっと可愛いとか思っちまった。自己嫌悪。
「えっと……そうだそうだ」
　しばらく考えてキヨカは嬉しそうに顔を綻(ほころ)ばせる。
「そんなとこでぼさっとしてないで、さっさと来い！」
「……」
　はい？
「あのな、なんだそれは」
「絶対的服従強制命令！」
　よくわからん事を即答で返しやがって……。
　意味はなんとなくわかるからいいけど……いや、よくないけど。どっちだよ。と、一人ツッコミ。まったくもって莫迦みたいだ。そういや、少し前にキヨカに言われたような気がするけど……。
「とにかく、トールちゃんは私についてくればいいの」
「だから……」
　人の家なんだから、と言おうとしたが、
「反論は認めないから」
　その言葉に遮られた。
　どうやら、キヨカには勝てないらしい。
「わかりました。わかりましたともさ」
　諦め半分……いや、半分じゃなくて全部だな。もう、どうにでもなれってか。
　話しているだけでも疲れる。
　もう、反論なんかやめて、素直に従ってさっさと終わらせる方が得策か。流されるだけの方が楽だし。
「んじゃ、さっさと行くよ」
　いや、充分今でも突っ走ってるし……と反論しそうになってしまった。つい今しがたしないって決めたばっかだろ、俺。
　ほとんど家具がないもないがらんどうの家の中を我が物顔で歩いていく。埃っぽいからいいじゃん、と土足で。今になって気付いたよ。
　過ぎた事をぐだぐだとは言うまい。
　それにしても、広いもんだな……。田舎の一軒家って基本的に広いイメージがあるけど、本当に広い。外からだとそれほどにも見えないんだけどな。
　じゃぱにーず・まじっく？
　ほとんど家具がないから余計にそう感じるだけかもしれないけど。そもそも、住んでいた頃も、こんな感じだったのかもしれないけど。意外と日常生活に必要なものって少ないんだよな……

。
　俺自身も記憶がほとんどないこの家を散策する。なんだか空き巣みたいだな……。あながち間違ってもないってのがミソだな。
　しっかし……こうなんにもないと、別に漁るようなものもないわけだ。
　押入れを開けたりとか、戸棚を開けたりとか、そんなもんだ。
「なんかつまんない」
　そんな作業をこなしていると、キヨカが唐突にぼやいた。
　おいおい、そりゃないだろ。
「こういう家ってさ、なんか隠し扉とかあってもいいと思わない？」
　いいと思わない？　とか言われてもな……。世間一般的にそんなものがある方が希少だろ。っていうか、そんなの聞いた事ないし。それこそ――
「……忍者屋敷じゃないから」
　仕方なくツッコミを入れる。
　もしここが伊賀や甲賀や根来なんかの忍者の里ならそういうのもあるかもしれないが、あいにくとここはそんな場所じゃない。逢稀(あき)村だ。ほとんど知られていない辺境なんだぞ。
　いや、だからこそそういうものがあると思ったのか？
　隠れ里――とかそういうもの？
「だいたいな、じいさんの家にだってそんなもんないだろ？」
「うん」
　即答。
　なんか、ここで即答されると言葉ないな。
「だったら、どうしてここにはあると思うんだ？」
「理由なんてないけど」
　即答。
「……お前の思考がよくわからん」
　わかろうとすればするほど疲れる。考えるだけ無駄な気もしてきたし。
「ちょっとした期待じゃない。自分の知っている場所に、なにかワクワクするようなものがあったらいいと思わない？」
　その言葉だけを聞けば、どことなくロマンを感じさせるものがあるのだろうが、今のこの状況で言われると脱力感しかない。
　でも、ちょっとそういうものがあってもいいと思ってしまった。冒険心ってやつ？
　だけど、実際にそういうものがあるわけないし……。
「あるといいとは思うけどな、ないもんはないんだから」
「そこで諦めちゃダメ！　信じれば見つかるんだから！」
　なんだか、徳川埋蔵金とかを探しているみたいだな。
「男の子はもっとロマンを持ってなきゃダメなの！」
　もうその理屈がよくわからん。

　一般的に女の人って現実的だとか言わないか？　キヨカにはそれが微塵も感じられないんだが。
「とにかく、必要なのは冒険でしょ？　でしょ？」
　そんな強調して言われてもな……。俺たちは、とレジャーハンターでも、冒険家でもないわけだからな。
「必要だとは、どうしても思えないのだが」
　しまった。本音が。
「むきーっ！」
　なんだかよくわからない雄叫びをあげ、ドカドカと足を踏み鳴らした。

　ーーめきょっ！

　実際にそんな音がしたかはわからないが、少なくとも俺は聞こえた。
　なにをしたんだ、こいつはーー
　と、思った次の瞬間、

　ーーぼずっ！

　と、畳が抜けた。
　キヨカの足がものの見事に畳に埋まっている。

　ぽかーん。

　まさにそんな顔をしていたと思う。
　思考がついていかない。
　いや、わかってはいる。
　畳にキヨカの足が埋まっている。
　でも、理解できないというかなんというかーー
　なんだ、今のこの状況は。
「お、おい……。大丈夫なのか？」
　ちょっとだけ心配になって声をかける。だってほら、畳に足が埋まってるんだぜ。
「……」
　しかし、キヨカはアナザー・ワールドへ旅立っているのか、どうやら俺の声が聞こえていないらしい。
そりゃ、呆然ともなるわな。普通に考えて畳に足が埋まるなんて事ないしな……って、よく見れば足首まで埋まってるじゃないかよ！　ちょっと待て。畳ってそんなに分厚いものだったか？　分厚くてもせいぜい四、五センチだろう。足首までってありえなくないか？　床も貫通した

って事なのか？　キヨカの足踏みで床が抜ける？　それって、キヨカの力が……いや、床が腐っていたのか？　そうだよな。そうに決まってる。……って、それはそれで危険じゃないか？　床が腐ってるとしたら、ここも――俺の足元も同じようになる可能性があるというわけで……。
　ゆっくりと視線を自分の足元に移動させていく。
「ねえ、トールちゃん」
　キヨカの声が少し震えている。初めて聞く声だな。
「な、なんだ？」
　思わずこっちも声が震えてくる。
「あのね、あのね……」
「な、なんだよ」
　妙に焦らされると余計に怖いんだが……。
「あのね、床がないの」
「……」
　はぃ？
　一瞬なにを言われたのかよくわからなかった。
　床がない？
　つまり、マジで床が抜けたって事か？
　……やっぱり腐ってる？
「あのね、足がぶらぶらぁってするんだけど……」
　えっと……すっぽりと抜けていると思っていいんだろうか。
　いや、ちょっと待て。床が抜けてるって事はだぞ、キヨカの足は大丈夫なのか？　腐ってるとはいえ、多少の怪我はあるだろう。もしかして、足を怪我してぶらぶらしているとか……。
　をいをい、それってまずいんじゃないか。
　なんか、そんな事……。
　さぁーっと血の気が引いた。
　もしかしてこれって――

　だ・い・さ・ん・じ？

　レスキュー沙汰ですか？
　でも、こんな村にそんなもんありゃせんよ。医者すらいないってのに。
　無医村怖いよ。無医村をなくそう。俺、今その考えに猛烈に賛成！　無医村をなくそうって運動に、喜んで参加するね。
「おい、キヨカ、大丈夫なのか？」
　とりあえず確認は大事だよな。
「大丈夫ってなにが？」

　キヨカはなんでもない顔で答える。
　もしかして、傷のあまりの痛みで麻痺しているのだろうか。だとしたらなおヤバイ。
「ほら、足……」
　もう、どう言っていいのかわからなくなってきたぞ。だいたい、なにを言ってるのかも怪しいし、わけのわからない言葉になってたりするし……俺もしかしてパニクってる？
　冷静さを完全に失ってる？
　いやいや、こんな時こそ冷静に……冷静に……なれるわけねぇだろ！
「足、大丈夫なのかって訊いてんだよ」
「……大丈夫って、だからなにがよ」
「足だよ、足」
　焦っているから苛立っているのか、ちょっと喧嘩腰に言ってしまう。
「そんな怒って言わないでよ！　だから、足がどうしたってのよ。大丈夫って、トールちゃんの頭こそ大丈夫？」
　酷い言われようだ。
　しかし、今はそんな事はどうでもいい。
「なんでもいい。とりあえず足見せろ」
「……セクハラ？」
「……」
　予想外の言葉に一瞬、沸騰した脳が冷める。
　なにを言ってやがるんだ、こいつは。
　いや、待て。確かにちょっと変態ちっくな発言だったか？　いやいや、俺にそんな下心は微塵もない。ナノ単位でもピコ単位で考えてもそんな気持ちはない。俺はただ、純粋に心配してだな……いやいやいや、こんな言い訳を考えてる時点でなんかダメっぽい気がしてきたぞ。そうだよ。やましい事がないんだったら、即答で答えればよかったんじゃないか。莫迦、そんなんじゃない……って。それをこうして逡巡してしまった時点で、なにか心に一物があるように思われてしまうんだよ。
「莫迦、そんなんじゃない」
「……その割には、タイムラグがあったみたいだけど」
　じと目で睨まれた。
　な、なにか言わないと……。
　だめだぁ、言葉が出てこない。
　絶体絶命……。
「……そ、それはだな。お前が急に変な事を言うからだな……」
「嘘っぽい。言い訳がましい」
　即答で返された。
　どうしてだ。本心を述べているのに。どうしてなんだ。
　俺は頭を抱えて悶える。

なんか、変な方向に進んでしまっている気がしてきた。なにかがずれている。
その前に、どうしてこんな事になった？
どうして俺は言い訳なんてしなきゃいけなくなった？
そうだ。足だ！
キヨカの足が――
「んしょ！」
と、キヨカが畳から足を抜いた。
足は大丈夫なのか？
俺はキヨカの足を凝視した。切れていないか？　血が出ていないか？　骨は折れていないか？
心配だった。
ただそれだけだった。
「……ヘンタイ」
しかし、キヨカの口から発せられたのはそんな言葉だった。
「……」
正直、ショックだった。
そりゃもう、言葉なんて出ない。
親の心子知らずみたいなもんか。
そんなに危険な視線だったのか？
それはもうどうでもいいか。
「足は大丈夫なのか？」
「しつこいな！　大丈夫だって言ってるでしょ！」
即答された。しかも、かなり怒ってらっしゃるようですよ。
「だってた……気になるじゃないか。お前、足が畳に埋まったんだぞ」
心配してなにが悪いというんだ。心配されているうちが華だぞ。
「大丈夫だってどれだけ言えばわかるわけ？　それとさ、さっきの〝だってた〟ってのはツッコミ欲しかった？　欲しかったの？」
うっわぁ……こんなツッコミいらなかったよ。っていうか、どうして俺もここでこんな事を言ってしまったんだろう。どうして、噛んじゃったんだよ。
もう、パニクってるな……。まともな思考回路はどこへいった？
「まあ、それはどうでもいいんだけど――」
流された……。
いや、その方がいいのか。忘れてくれ。
「――この下ってなんで空洞なの？」
……？
空洞？
なにを言ってるんだ？
「空洞ってなんだ？」

「あのね、さっき足を突っ込んだじゃない。その時ね、床がなくて足がぶらぶらだったの」
　えっと……つまり？
「床がないって事か？」
　キヨカはこくりと頷いた。
　ちょっと待てよ。床がないってどういう事だ？
　腐って抜けてしまってるって事……でもなさそうだし。
「どうなってるんだ？」
「知らない」
　いや、独り言だったんだけど。即答で返されたし。
　それはともかく、見てみない事にはいかんよな。もし、他の部分も同じだとすれば、ここに立ってるのも危険だしな。
　というわけで、畳を上げてみる事にした。
　よいしょっと畳を上げる。
　――と、そこには一メートル四方くらいの穴が空いていた。いや、穴じゃないな、これ。だって……。
「梯子(はしご)？」
　キヨカがぽつりと呟く。
　そう、そこには下に続く梯子があった。
　つまり、これは床下に作られた部屋――つまり、地下室って事になる。
　ここに住んでいた期間は短かった事もあるけど、こんなものがあるとは想像すらしていなかった。
　よく見ると、どうやら本来は扉があったようだ。壊れた蝶番(ちょうつがい)があった。
　そりゃそうか。扉というか、蓋(ふた)がないわけがない。でないと、危険極まりないからな。
　しかし、こんなものが見つかったとなれば――
「やったね☆」
　キヨカが目を輝かせている。
「探検するよ！」
　やっぱりかよ……。
　こういう予感は当たらなくていいんだけどな……。はぁ～。
「トールちゃん、れっつ・ら・ごー！　だよ」
　そう言うが早いか、キヨカはすたすたと梯子を下りていく。暗くて足元が見えないはずなのにすたすたと下りてるし。
　なんだ、こいつは。猫目なのか？
「おい、待てよ」
　仕方ないな……。このままキヨカを一人で行かせるわけにはいかんし。
　結局こうなってしまうんだな……。
　びくびくとした足取りで下りていく。ああ、そうさ。俺はキヨカほど大胆には生きられないん

だよ。
　それにしても、こういう場合の定番って梯子なのかな……。それをスタスタと下りていくんだから、キヨカって実はすごいやつ？
　ああ、どうでもいい事ばっかり考えてしまうな。
　さて――下りてみたはいいものの、明かりはどうするんだ？　ドラマとかだとライターなんだろうが、俺は喫煙しないからな……当然ながらそんなものは持ってない。それはキヨカも同じはずだ。
「真っ暗でなんにも見えないよ」
　ほれみたことか。
「考えもなしに下りていくなよな……」
「……いいじゃん」
　あれ？　ちょっとだけ間があった。てっきり、なにか言い返されるかと思ったんだけど。準備が悪いとか。それになんだか、気落ちしたような声だし。まあ、これくらいの方がこっちはありがたい。元気すぎるのも時には考えものだ。
　だけど……なんだ、この物足りない感じというか、しっくりこない感じは。
　もしかして、振り回されるのに慣れてしまってるのか？
　いや、ここ数年はまともに会ってなかったんだぞ、そんな事……あるわけないって。
　どうしたらいいものか立ち止まって考えていると、キヨカがしょんぼりとした表情で戻ってきた。
「明日、出直そう」
　元気なくそう言うと、とぼとぼという表現がこれほどしっくりくるのを見た事がないほど、とぼとぼと家を出て行った。
　とりあえず畳を元に戻し、慌ててキヨカを追う。
「おい、ちょっと待てって」
　キヨカの足取りは重かったのが幸いしてすぐに追いつけた。
「元気出せって」
　なにを言えばいいのかわからなかったので、出てきた言葉はありきたりなものだった。
「……うん」
　キヨカは肩を落として力なく答える。ホント、キヨカらしくない。
　ずっと無言で歩き続ける。
　誰もいない道。
　陽はまだ高いのに夕日が見えるようだ。
　それ以降、声を掛ける事ができず、無言での帰宅となった。――って、なんかこう表現すると死んだみたいじゃないか？　まあ、いいか。
　ちなみに、家に帰るとじいさんの制裁が俺を待っていた。
　なんでも、キヨカの元気がないのは俺の不届き故だとかいう、それはもう理不尽なものだった。

俺も抵抗は試みたのだが、いかんせん剣術の師匠であるじいさんに敵うはずもなく、竹刀でぼこすかにされてしまった。
思い返してみても理不尽で不条理で納得できん！

(C)2012 STUDIO SAIX All Rights Reserved.

⑤

　どうやらキヨカが昨日の夜に準備をすませていたらしく、リュックを二つ持って部屋にやってきた。
「さぁ、行くよ」
　そう言うと、容赦なく手を握って引っ張っていった。
「……」
　声が出ない。
　めっちゃ痛いんですけど……。
　キヨカさ～ん、俺の手は今大変な状態なんですけど……。
　そんな叫びを心の中で繰り返すのが精一杯だった。
　昨日の扱いもどうかと思ったが今日も同じようなものだな。ホント、不憫(ふびん)な俺。

　さて、あの床下に設(しつら)えられた梯子に再び来た。
　この先になにがあるのかと思うと、胸がときめくね。俺って意外にソーヤなのかもしれんな。ちなみに、ソーヤってのは大人になっても子どもの心のままって事な。
ガキの頃の探検とか……今じゃなんとも思わなくなったと思っていたんだけどな……。
「さあ、これ付けて」
　そう言って渡されたのは、ヘルメットにライトがついた……なんて名前なのかは知らないが、ともかくそれだ。なんだか、なんとか探検隊みたいな気分だ。
　でもまあ、これだと両手が空くからいいんだけど。懐中電灯よりは便利だな。
「さっさと下りてよ」
　と、キヨカに急かされるまま下りる。
　頭に光があっても足元が見えないんじゃ意味なくないか？　梯子を下りるのはやっぱ怖いぞ。
　かといって、ゆっくり下りようとすると頭上からキヨカの叱責が。
　どうしようもないじゃないか……できるだけ早く梯子を下りる。
　幸いにもそれほど深くあるわけじゃないのでなんとかなったが、明るいから大丈夫と油断していたというか、安心しきっていたところにこれはきつい。
　当のキヨカはというと……昨日と同じくスタスタと下りてくる。ホント、こいつの運動神経ってどっかおかしいよね。この村にずっといたから野生化してる……とか？
　梯子を下りると、そこには狭い通路が続いていた。一本道のようなので迷う事はなさそうだ。
　っていうか、謎の地下通路だな、これは。なんで普通の家の地下にこんなもんがあるんだ？
もしかして、ばあちゃん家って普通じゃなかった……とか？　まさかね。
　ともかく、進むしかない。この先になにがあるのかは知らないが、それも進んでいけばわかるだろう。
「ほら、早く行って」
　一人分の幅しかないので、いまさら前後を入れ替わる事ができず、仕方なく俺が先導する事に

なる。
　両脇の壁にはきちんと板で補強されていて崩れる心配はないようだ。それがこれが明らかになんらかの目的で作られたという事を証明しているわけだが……いったいなにがあるんだろうね。やっぱソーヤなんだね、俺。わくわくしてきた。
「ねぇ、この先になにがあると思う？」
　キヨカが訊いてくる。キヨカも興奮しているのか声色がいつもと違う。
「そうだな……お宝――いわゆる金銀財宝って事はないだろうな」
「夢なさすぎ」
　即座に返される。
「しかしだな、現実的に考えてあると思うか？」
「思わない」
　即答だ。しかも、思わないのかよ。
「なら、夢がないとか言うなよな」
「現実と想像は別だもん。ちょびっとくらい期待してもいいと思うんだけど……」
　拗ね気味の声だ。きっぱりと否定しすぎたかな。
「まあ、期待だけはしておこう。獲らぬ狸の皮算用はしたくないがな」
「やっぱ夢がない」
　やれやれだ。
「じゃあ、この先にはお宝があるかもな、とでも言えばいいのか？」
「夢見がち」
「……」
　即答された。
「なにを言っても否定する気かよ」
「……ま、まあ、男は小さい事を気にしない」
　誤魔化された。
　ったく……。
　でもまあ、こういうやりとりも悪くない。ずっと講義講義の毎日だったからな……。それはそれで充実していたけど。そういや、講義の方は大丈夫なんだろうか。あの教授、休みとか関係なく招集掛けたりしやがるからな……。あとでヨシマサに訊いた方がよさそうだな。
「あ、扉」
　と、そんなキヨカの声で現実に戻る。目の前には木の扉があった。本当に目の前。危うくぶつかっているところだった。危ない危ない。キヨカ、サンキュと心の中だけで感謝しておく。
「開けて」
　なんだか横柄な態度だな。
　まあ、言われなくても開けるけど。っていうか、開けたらトラップ発動――とかないよな。さすがにそれはないよな。信じるぞ。……なにをって、全てをだ。
　ちょっとビビりながら扉を押す。

　ずっと開けられていなかったせいだろうか、蝶番が錆びていて思った以上に力がいったが、トラップが発動するような事はなく、無事に開ける事ができた。
　慎重に歩を進めて中に入る。埃っぽい感じと黴(かび)っぽい臭いがする。それは多少覚悟していたからいいのだが……それよりも、目の前にあるものに驚かされた。
　四畳半はあるだろう部屋の正面の壁には、色鮮やかな朱色の鞘に収まった刀が飾られていた。それは色褪せる事なく、色がないこの部屋で唯一の色である事を主張しているようでもあった。
「綺麗……」
　キヨカの口からも自然とそんな言葉がこぼれた。思わず魅入られてしまう鮮やかさだった。
　まるでその刀に引き寄せられるように足が動いていた。
「ちょっとトールちゃん」
　心配そうにキヨカが言うが足は止まらない。
　催眠術にでもかかったのか、と自分でも思ってしまう。止まろうと思ってもどうにもならないのだ。
　そうして目の前にたどり着くと、これまた自然にその刀に手を伸ばしていた。
　ごくりと唾を飲み込む音がやたらと響いた気がした。
　慎重に刀を持つ。
　ずしりとした確かな重みを感じる。本物だ。
　そして――おもむろに鞘から抜こうと……抜こうと……あれ？　抜けない。
　抜けなかった。
　錆びているのだろうか。しかし、錆びて……こんな事になるのか？　日本刀に詳しくはないからわからないけど。まあ、そういう事にしておこう。
「どうしたの、トールちゃん」
　刀を持ってぼけっとしている俺に声を掛けてくる。
「……抜けない」
　なんか間抜けだと思ったが、事実なのでしょうがない。
「なんか間抜けだね」
　それは俺も思ってるから。
　それで興味を失ったのか、妙な緊張がほぐれたのか、キヨカも部屋に足を踏み入れて物色しだした。
　物色するといってもそれほど物があるわけでもない。
　改めて部屋を見回すと、部屋の左に大きな桐の箪笥があるくらいだろうか。その箪笥の横には、和綴じの本が大量に積まれている。部屋の右は大きな桐箱が置かれている。ちなみにキヨカはその桐箱の中を物色していた。箪笥の方に行かなかったのは、やはり周囲に本があったからだろうか。そんな気がする。
　というわけで、俺はキヨカが行かなかった方――つまり、和綴じの本をぱらぱらとめくってみるのだが……見事なまでの草書体で書かれているので、さすがに郷土文化の研究をしていたとしても解読できなかった。せめて言い訳させてくれ。暗くて見づらいんだ。そういう事にさせて

くれ。いや、言い訳をすればするほどダメなのか。こういうのは素直に認めた方がいいのか。
　どっちにしろ、俺には読めなかった。それは事実だ。認めよう。潔く、な。
　なので、それは諦めるとして箪笥の抽斗を開けて中を物色する事にした。なにがあるんだろうか。
　なんだか墓荒らしでもしている気分だな。自分の家のはずなのに、どうしてこんなに泥棒さんな気分なんだろう。
　あまり気にしてもしょうがないので、できるだけ頭から振り払い、箪笥を物色する。あぁ、この表現がいけないのか。物色じゃなくて探索するとしておこう。
　上の抽斗から順に開けていくが、特になにが入っているわけでもない。着物くらいか。
　年代もののようだが、こういうものってプレミアとかあるんだろうか。あいにくと着物は詳しくない。もっとも、骨董品に詳しくないのだけど。
　なので、ここでなにが見つかっても、その価値がわかるかと問われれば、わからん、と答える。
　郷土文化を研究していても、そっち方面はさっぱりだったりする。まだ始めて三ヶ月ほどなんだから勘弁してくれ。
　そんなわけで順に見ていったのだが、やはりめぼしいものは見つからなかった。
　それはキヨカも同じだったらしく、残念そうにしていた。どうやらキヨカが物色していた桐箱には、ガラクタとしか思えないようなものしかなかったそうだ。
　結局、価値がありそうなものといえば、あの鞘から抜けない日本刀と箪笥に収納されていた着物くらいだろうか。
　とんだ宝探しの結末となってしまったものだ。実質的に収穫はなかったのだから。
「んじゃ、そろそろ帰るか」
　朝からここに来たわけで、そろそろ昼だ。俺の腹がそれを告げている。
「……残念かも」
「そう言うな。ちょっとした宝探し気分を味わえただけでもよしとしようじゃないか。そろそろ腹も減ってきたし、帰ろうぜ」
　キヨカは未練たっぷりなようで、そうね、とは言いながらも、まだ箪笥をじっと見ていた。
　ほれ、行くぞ……と、手を引くが、足が地面に固定されてしまったのか、動こうとしない。
「あのなぁ。ガキじゃないんだから、諦めってもんを覚えようぜ」
「なんか、そんな大人はイヤかも」
　確かに諦めを覚えるってのはいい事とは言えないかもしれないけど、人生それも大切だと俺は思う。
「ねぇ、もう十分だけ……」
「キヨカ……」
「お願い。それで完全に諦めるから」
　真剣な顔で頼まれれば、それを却下する事なんて俺にはできるはずもなく……、
「仕方ないな。十分だぞ。それ以上は抱えてでも帰るからな」

　そう言うと、キヨカは本当に嬉しそうに、うん、と笑顔で頷いた。
　仕方ない、付き合ってやるか。俺の腹の虫さんよ、もうちょっとおとなしくしててくれ。
　しかし、他にどこを探そうというのだろう。
　この部屋にあるのは、箪笥と桐箱と和綴じの本だけだ。箪笥も桐箱も探した。和綴じの本は解読不能だ。もしかして……隠し部屋とか？　いや、それはない――とは言い切れないか。
　どうやらキヨカもそう考えたらしく、さっきから壁を調べている。キヨカが一生懸命に探しているのに、俺がぼけっとしている道理もないだろう。俺も壁を探そう……として、ふと気付いた。確かに箪笥の通常の抽斗は全部調べた。が、こういう箪笥には稀に隠し抽斗というものがあるという事を思い出した。一番下の抽斗の下は前板になっているが、それも抽斗になっている箪笥もある。
　もしかして……と、ちょっと期待を込めて手を伸ばす。
　――と、
「あった……」
　本当に隠し抽斗があった。
　湿気のせいだろうか、少し固いがそれでも引き出してみる。
「……」
　そこには予想外のものが入っていた。
　その三センチほどの深さの抽斗に一枚の紙が入っていた。
　ただの紙ならなんとも思わなかっただろう。しかし、それはなにかの地図に見えた。
「おい、キヨカ」
　キヨカを呼ぶ。
「どうしたの？」
　壁を調べていたキヨカが少し怪訝そうに来た。
「今は、隠し部屋がないか探して……」
　と、そこまで言って言葉を飲み込んだ。キヨカの視線は、隠し抽斗の中に釘付けになっている。
「トールちゃん、それ……」
「なにかはわからんが、地図っぽい」
　それが精一杯だった。俺も興奮していて上手く言葉が出ない。
　こういう状況でなければキヨカは、ちゃんと探さなかったんでしょ。サボってた証拠じゃない、こんな風に見つかるなんて、とでも罵っただろう。しかし、キヨカも言葉が出ないようで、口をパクパクとさせている。まるで金魚みたいだな……と思ってしまった。と、そんな思考のお蔭で少し冷静になれた。
「とにかく、これを持って一旦帰ろう」
　キヨカはまだ呆然と立ち尽くしているが、なんとか頷く事はできた。
　人間ってあまりに驚くと魂が抜けたようになってしまうんだな。そんな状態のまま外に出た。もちろん、あの紙は持っている。

(C)2012 STUDIO SAIX All Rights Reserved.

　それから、どういう風に帰ったのかは覚えていないのだが、気がつけば遠野家の居間にいた。
　どうやら昼食も食べていたらしく、梅干の酸っぱさで現実に戻ったのだった。
　そんな昼食だったので食べた気は全然ないのだが、それすらもどうでもよかった。
　今大事なのは、目の前にある紙なのだ。
　キヨカとテーブルを挟んで向かいに座る。テーブルにはもちろん紙を広げてある。
　改めて見ると、やっぱり地図に見える。
　その地図らしきものの真ん中辺りには、▲の印がある。その▲の下には〝昴〟という字が。でもって、そのずっと左斜め下には〝参〟という字が。右斜め下には〝奎〟という字が書かれている。
　その図とは別にこんな文字も――

　虎守護的山蟲封印
　畢有那個

「「……」」
　俺もキヨカも無言になった。
　なんだ、これ。
　暗号……なわけはない。
「とらしゅごてきやまむしふういん？」
　キヨカがとりあえずそのままを口にする。
「えっと……これ、なんて読むの？」
　そう言って指したのはもちろん〝畢〟だ。
「俺にもわからん」
　残念ながら読めない。っていうか、こんな漢字は普通使わないって。
「なんとかあるなこ？」
　そのまま読んでも意味不明だな。
「なぁ、順に考えていこうぜ」
　一行目はともかく、二行目はサッパリだ。
「う～ん」
「どうした？」
　キヨカがなにやら考え込んでいるので気になった。
「あのね、この文字なんだけど、どっかで見た事がある気がするんだよ」
　そう言って、地図にある三つの漢字を指す。
「そりゃ、俺だって〝昴〟と〝参〟くらいはあるけどさ……。他のは普段使わないだろ」
「そうなんだけど……どっかである気がするの」

「じゃあ、なんとか思い出してくれ。俺はこの意味を考えるからさ」
「……うん」
　さて、そう言ったものの、サッパリだ。なにがなにやらちんぷんかんぷん。
　あぁ〜っ！　なんなんだ、こいつはよ！
　日本人なんだから日本語で書こうぜ。漢字も日本語だっつったらそうなんだろうけどさ。元は中国だとか、そういうツッコミは、この際ナシの方向で頼む。平仮名とか片仮名ってのがあるんだから、それも使っていこうぜ。な？
　と・に・か・く！
　わかりやすく書いておいてほしいものだ。解読できなくちゃ意味ないじゃん。どこの誰が書いたのかは知らないが、不親切極まりないぜ。
　暗号なら、簡単に読めるのもまずいのかもしれないけどさ。
　うんうんと唸る事一時間。
　これっぽっちもわからない。
　なんとなく意味としては〝虎が守護する山に蟲を封印した〟ってのはわかるのだが、っていうかまんまだが……虎が守護する山ってどこだ？　まさか、マジで中国とかありえないぞ。
　仕方ない。このまま悩んでいてもしょうがない。誰かこういうのがわかりそうなヤツは……やっぱりヨシマサくらいか。
　とにかく、頼りになりそうなのはヨシマサくらいしか思いつかない。友達いないのか、俺は。多くはないのは確かかも。基本的にヨシマサとつるんでるからな……。
　ってなわけで、ヨシマサに早速メールを作成する。文章じゃないと伝えきれないからな……と、途中まで打ってから止まってしまった。
　二行目の最初の漢字はなんと読むのだろうか。でもって、変換できるのだろうか。
　とにかく読み方を調べないと始まらない。
「なあ、漢字辞典ってどこにある？」
「ん？　漢字辞典？」
「そう」
「……どこだろう？」
　をい。
　仕方ないので諦める。キヨカの事だ、持ってないとかそんなとこだろう。授業で使うとかで学校のロッカーに放置してあるとかな。俺がそうだった。
　とりあえず調べようにも調べられないので、えっと……田の下に華のくさかんむりがないような感じの漢字、と。で、あとはぽちぽちと打って……完成。そしていざ送信……と、ここで思わぬ事態が。
　忘れていた。ここは俺の家じゃなかったんだ。逢稀村だったんだ。
　電波がない。
　……なんてこったい。
　文明の利器もここではガラクタですか。

　これは口で伝えるしかないのか。はぁ〜。
「キヨカ、電話借りるな」
「うん、いいよ」
　キヨカはずっとなにかを思い出そうとしているが、思い出せずにいるようだしな。
　ここは、我が親友のヨシマサ頼みか。
　ってなわけで、早速電話を……って、そういや、ここの電話ってダイヤル式だったんだよな。プッシュしか知らない世代なもので、これはこれで面白かったりもする。
　ジジジ……と番号を回すたびに音がするのはちょっと面白い。十一桁も回していると、途中で鬱陶しくなってきたけどな。プッシュだとピポパポと押せるのだが、ダイヤルは戻るのを待ってからまた回して……と、面倒だったりする。しかも、どの番号まで回したか忘れそうになってしまう。
　と、喜んだり鬱陶しがったりだったがなんとか繋がった。
　呼び出し音が鳴る。さぁ、出てくれ。
『もしもし、満仲(まんなか)ですが』
「ああ、俺だけど」
『もしもし？　どちらさん？』
「トオルだ」
『なんだ、トオルか。どうしたよ、なんか変な番号だったけど』
　やっぱり怪しんだか。それでも出てくれたのはありがたい。
「あのさ、今、田舎にいるんだわ」
『田舎？　って、お前大丈夫か？』
「大丈夫ってなにがだ？」
『明後日、教授の呼び出しあるんだぞ』
「明後日……？　なんだ、それ。知らんぞ」
『あれ？　おれ、言わなかったっけ？』
「……」
　マジかよ。
　聞いた覚えはない。ていうか、休みになってから連絡したのは今が始めてだったりするぞ。なんなら通話記録を調べたっていい。断言できる。
『言ってない？　悪い悪い。明後日な教授のゼミがあるから出席しろよ』
「あのなぁ……無理」
　今頃なにを言うんだ、こいつは。しかも明後日ときたもんだ。今から帰る事は不可能じゃないが……なんとなくそれはできない状況だな、これは。別にキヨカはこの際どうでもいいんだが、この地図が気になってしょうがない。
『単位がやばいぞ』
　確かにやばいな。知らなかったとはいえ、ゼミを欠席するなんて……あの教授なら即落第とかしそうだ。その言葉にちょっと帰ろうかな……とも思っちゃったりしちゃったが、やっぱ帰れな

いよ。
「教授には自主レポートを田舎で書いてるとでも言っておいてくれ」
　そのつもりもあったから、あながち嘘じゃない。しかし、これでなにがなんでも書かなくてはいけない状況になってしまった。
『わかった。んじゃ』
「って、ちょっと待て」
　用件は終わりましたと、通話を終えようとしやがった。
『なんだ？』
「どうして電話を切ろうとする」
『ゼミの話終わっただろ』
「違うだろ。俺が掛けたんだろうが。しかも、いきなりそんな重大なお報せをされたんだ」
『そういやそうだったな。で、なんの用だ？』
　ったく……本題までやたらと長く話した気がする。
「あのさ、お前にちょっと頼みがあるんだ」
『頼み？　なんだ？』
　面倒くさそうだな……。まあ、俺がその立場なら同じような反応をしただろうな。もしかしたら、問答無用で電話を切ってそうだ。我ながら悪いヤツだと思うさ。
「とある文章があるんだが、どうにも解読できない。そこで、お前にそれを頼みたい」
『なんかよくわからんが……どんな文章なんだ？』
　とにかく、興味は示してくれた。ありがたい。
「それがな、全部漢字で書かれていてな……」
『メールで送れ』
　即答された。当然だな。
「電波が届いてなくて送れないんだ。送れるならそうするわい」
『じゃあ、ＦＡＸは？』
「ない。そもそも、これも黒電話だ」
　黒電話でＦＡＸが使えるわけないしな。パソコンなんてものも当然ない。
『黒電話？　まだあるのか。是非とも見てみたいな。教授なんか喜びそうだな。現役があるって』
　その光景が容易に想像できる。あの教授なら大喜びだろうな。
「とにかく、そういう文明の利器がほとんど無効なわけだ。口頭で悪いが、なんとか頼む」
『仕方ない、他ならぬトオルの頼みだしな。メモを探すからちょっと待ってくれな』
「了解」
　そして、それから二分ほど待たされた。
　その間に思ったのは電話代の心配だった。絶対怒られるな、これ。
『お待たせ。んじゃ、言っていってくれ』
　というわけで、俺はその文字を順に言っていった。

　その答えはすぐだった。
『虎が守る山に蟲を封印する。終わりがそこにある――ってなとこじゃないか？　もし虎が白虎だとしたら〝あめふり〟の事かもしれないけどな。そうすると、後半は〝あめふりにある〟になるんだろうけど』
　なんだ、こいつは。メモを探す方が時間掛かるってのはどうなんだ。こんなにすぐ答えられるものなのか？　やっぱり、ヨシマサって、なにげに頭いいよな。だからこそ、こうして頼ったんだが。
「……すまん。サッパリわからん。アメフリってなんだ？」
『畢宿(あめふりぼし)だよ』
　疑問符が頭の上に大量発生する。なにを言ってるんだ？
『二十八宿って知ってるか？』
「知らない」
　即答してやった。
『天球の赤道上を二十八に分割したものだ。そのうちの西方白虎七宿の第五宿が畢宿だ』
　そんな説明をされても、なんのこっちゃわからん。
　やっぱり、こうして説明されてもわからんのだが。日本語で頼む。いや、日本語には違いないのだが、わかりやすく言ってもらいたいものだ。それとも、こんな事もわからない俺がダメなのか？　これが、わかりやすい説明なのか？
「で、そのお星様がなにか関係あるのか？」
『さあな。中国関連の文章っぽかったから、その可能性もあるんじゃないかと思っただけだ。まあ、普通に訳せば、さっきも言ったが、虎が守る山に蟲を封印した。終わりがそこにある――となるわけだ。その蟲とやらが封印から解放されると世界の終わりって事じゃないかな？』
「なるほど……よくわからんが、そうなのかもな。……あ、そうだ、この文章の他に地図が書いてあってさ、そこに〝昴〟とか、誰々参上の〝参〟て書いてあるんだ」
『マジでか。なら、畢宿の可能性が高いな。昴宿(すばるぼし)も参宿(からすきぼし)も同じく西方白虎七宿だ』
「そうなのか」
　なんだかヨシマサの声が生き生きとしているのは気のせいだろうか。なんだか妙に楽しそうだな。
　しかし、スバルとかカラスキがどうとか……サッパリなんだが。
それにしても、こいつは博識だな。俺よりは。
　ついでだし、読み方が気になるから、訊いておこうか。読めないのはまずいしな。
「もう一つ文字があるんだ」
『どんな文字だ？』
　食いついてきた。そんなに興味がある分野なのか？
　とにかく、それは活用させてもらうぞ。
「大きいの下に、土が二つの圭って字なんだが……」

『奎(とかき)か』
　即答だった。
　トカキ？
　そう読むのか。
　っていうか、こんなにあっさりわかると思ってなかったから、一瞬なにを言われたのかわからなかった。
『奎まで書かれているとなると、完全にそれは西方白虎七宿じゃないか。他に考えられない』
　なんだかよくわからんが、ヨシマサが今までにないほど興奮してるのがわかる。こんなヨシマサは初めてかもしれないな。
　この地図が、白虎なんとかってのが、ヨシマサの興味があるものだったって事か。
「とにかくサンキュな。またなにかあったら電話する」
　これ以上は混乱してきそうだ。俺の処理能力を超えそうな勢いだ。既に超えてる気もするがな。
　こいつが言ったほとんどの事を、既に忘れかけている。なんとか、メモにそれらしい事を書いたが、下手をすると、そのメモを解読できないくらいになってるかもしれない。断片的な記憶ってのは、こんなにダメなものなんだな。
『あ、ああ。なんかよくわからんが、レポート頑張れよ』
　そうだった。レポートがあるんだった。
　そう思うと、げんなりしてくるな。このまま帰って、ゼミに出席する方が楽なのかもしれないな。でも、この地図に興味がわいてきている俺がいるのも事実だ。
　少年――ソーヤの心が、俺を刺激している！
「おう。じゃな」
　本当に、ヨシマサには感謝だ。持つべきは、使える(・・・)親友だ。
『ああ』
　電話を切る……と、そこにはじいさんが立っていた。
「あ、あのさ……じいさん」
「くぅぉらぁっ！　お前は人の家の電話でなにを長話をしとるんじゃ！」
「あ、いや……その……」
　めちゃくちゃ怒ってるし。説明とか……言い訳とか……弁明とか……無理だな、これは。
　結局、散々文句を言われ、電話代として千円を徴収された。ぼったくりだ……と言いたかったが、言えませんでした。

(C)2012 STUDIO SAIX All Rights Reserved.

「ところで、キヨカとお前はなにをしているんだ？」
　じいさんは、俺からせしめた野口さんをヒラヒラさせながら訊いてきた。誤魔化してもよかったのだろうが、とりあえず本当の事を話した。というのも、もしかしたら、じいさんがなにか知っているかもしれないと考えたからだ。これにはキヨカも賛成した。
　というわけで、俺とキヨカとじいさんの三人で地図を見ている。
「なるほどな……これがその地図か」
　じいさんは貴重なものを扱うように地図を見た。
　しばらく無言で見ていたが、やがて口を開いた。
「ほう……これは、公恵(きみえ)さんの字だな」
　そう言ったじいさんは、どこか嬉しそうだった。
「キミエさんって？」
「俺のばあちゃんだ」
　キヨカに説明しておく。が、本当に俺が小さい頃に亡くなっているので、それほど記憶になかったりする。基本的に写真でくらいしか知らない。
「公恵さんはとても頭がよくて、好奇心が旺盛だったんじゃ。その公恵さんが書いたものなら、なにかしら意味はあると思うのじゃがな……」
　そう言うじいさんは、かなり遠い目をしていた。なにかしら俺のばあちゃんにあったのだろうか――と、勘ぐってみる。
　しかし、どうもこのじいさんから色恋沙汰は想像できそうにない。いや、このじいさん、基本的に思考は破廉恥なのだが、一見そう見えないのだ。結構知っているつもりの俺でも、もしかしてあれは演技で、わざとそんなキャラを演じているのではないかと思ってしまうくらいだ。
　それは、嫌々ではあったが剣道を習っていたというせいもあるのかもしれない。竹刀を構えているじいさんはあまりに真剣で、いつもとは空気が全然違ったんだ。それを知っているから……そんな風に感じてしまうのかもしれない。
「じゃあ、この虎が守る山ってわかる？」
　キヨカが訊く。
「それはお前、簡単だろうが。虎といえば西の方角。この村の東に白西山(はくせいざん)という山があるだろ。あれがそうだ」
　呆気なく解決したぞ。
　俺たち――基本的には俺だけだが――が散々考えてなにも思いつかず、探し出す事ができなかった山が、こうもあっさりわかってしまうというのは、なんだか淋しくもあるぞ。俺が骨を折った意味がないじゃないか。俺の苦労を返せってんだ。
　だが、なんか納得いかない。なんだ？　えっと……白西山はこの村の東……。
「ちょっと待て。西の方角でどうして東のあの山なんだよ。確かに名前に西ってあるけど」
　そうだよな。虎が西って事なら、西にある山じゃないのか？

「若造は知らなくて当然なのかのぅ……。それもまた、嘆かわしい」
　なんか莫迦にされた感じだ……っていうか、感じじゃなくて莫迦にされてるな、俺。確かに知らないけどさ。
　昔から気にはなってたんだよな。東にあるあの山が、白西(・)山って名前なのかって。
　昔、その山の向こうに村があったってのは、知っているんだが……それもやっぱり詳細はわからない。あったというだけだ。
「おじいちゃん、教えて」
「うむ、教えてやろう」
　キヨカが訊けば素直に言うのかよ。この孫バカが。と、心の中で叫ぶ。
「この周辺はな、詩稀(しき)という村が中心だったのじゃ。その詩稀の西にあるからあの山はそういう名前になったんじゃ」
　簡潔だな。だからどうしたって感じだが。
「ともかく、それは白西山の地図のようだな」
　地元民が断言するんだからそうなんだろう。ここは、年の功という事でじいさんを信じておこう。
　俺たちだけで考えていたらいつになった事やら……だからな。
「あ、そうか！」
　と、いきなりキヨカが叫んだ。あまりの唐突さに心臓が止まるかと思ったぞ。
「どうしたんだよ、キヨカ」
　胸を押さえながら訊く。やべぇ、かなりドキドキしてる。
「あのね、やっと思い出したの」
「なにをだよ」
「あの字、どっかで見た事あるって言ったじゃない――」
　ああ、そういや……そんな事を言ってたっけか。
「――それね、やっと思い出したの」
　キヨカはニコニコの笑顔だ。太陽のような笑顔……と、ちょっと詩人風に表現したくなる感じだったりする。
「で、なんだったんだ？」
　おざなりかもしれないが、とりあえず訊いておこう。
「なんか、そのおざなりな言い方気に入らないな……」
　キヨカはぷんすかと腕を組んで口を尖らせた。
　確かにおざなりに言ったが、それをそのまま直球で言うこいつもどうかと思うぞ。しかしまあ、ここは大人である俺がそれに相応しい対応をするべきだろう。
「そうか。で、なんだったんだ？」
　できる限り興味がある風に訊いてみた。
「演技くさい」
　即座に一蹴された。

　しかも、
「大根」
　とまで言われた。
　……凹んだ。
　いや、もともと俺には演技の才能なんてないわけだが、それでも凹んだ。
　演技ができないなりの精一杯だったんだ。それを否定されちゃったわけさ。
　それだけならまだしも、横でじいさんが、愉快愉快と大声で笑っているのがなんか気に障る。
　硝子の心を持った少年となって、こんな家出て行ってやる！　とか叫んで飛び出したい気持ちでいっぱいだ。
　しかし、ここは俺の家じゃないし、そんな事をしようものなら、このじいさんは笑顔で俺を送り出してくれるだろう。なんだか餞別をくれそうな……わけはないか。しかし、笑顔なのは確実だ。
　なんか、完全に負けた気がする。
　気がつけば、畳に〝の〟の字を書いていた。いじけモード全開です。俺のハートは全壊です。
〝そんなにいじけないでよね。わたしが悪かったから〟
　なんてキヨカが素直に言ってくれれば全快しそうなんだけどな……。そんな俺は妄想全開だな。はぁ〜。
　そんな俺を無視して、キヨカとじいさんの間では会話が進んでいた。
「あの文字って、おじいちゃんが昔に見せてくれた天文図に書いてなかったっけ？」
「そうじゃったな。よく憶えていたな。さすがわしの孫だ」
　そう言ってキヨカの頭を撫で撫でしている。和んでやがるな。
　そういやヨシマサも星がどうのこうの言ってたっけか。しかしまあ、どうしてその星に関連付けたがるのだろうか。そんなロマンティックな発想はどうもな……。
「しかし……公恵さんにしては単純な文章じゃな。畢宿(ひっしゅく)に蟲がおるとな……」
　と、じいさんは何度もその文章を読んでいる。漢文だか中国語だか知らないが、よく読めるものだ。
「おじいちゃん、すごいね」
　キヨカはすごく感心している。
　なるほど、あれはやっぱりあそこに蟲がいるとそういう意味なのか。ヨシマサは終わりがどうとか言っていたが、どうやらそれは違う解釈だったようだ。
「しかし、蟲か……どこぞでなにか聞いた事があるような気がするんじゃがな……」
　じいさんは地図をじっと睨んで考え込み始めた。
　蟲ね……。
　これって、宝探しとかでよくある隠語てヤツだったりするんだろうか。蟲を封印って事は、蟲をそこに隠した……とも解釈でいるわけだろ。つまり、蟲＝宝、と考えて差し支えなさそうなんだがな。
　しかし、そうするとこれは暗号でもなんでもなくただのメモという事になる。そのメモすら解

読できず、暗号に見えていた俺って……。もっと勉強するべきなんだろうか。こういう形でそれを思い知らされる羽目になろうとは……。
「とにかく、これをどうする気じゃ？」
「もちろん探す」
　キヨカは即答しやがった。それは俺もそう思っていたさ。なんだか楽しそうだからな。これが宝の地図だとすれば……の話だが。
　じいさんのお蔭で場所も判明したし、あとはこの〝畢〟の場所だけど……。
「まあ、お前ならそう言うと思っておったがな。おい、莫迦弟子」
　やっぱり俺なんだろうな。
「なんだよ、じいさん」
「自覚しておるのか」
「違う。この部屋にはじいさんとキヨカ以外は俺しかいないだろうが」
「ほう……そう思うか？」
　じいさんがにやりと笑みを浮かべた。
　おい……まさか、他に誰かいたりするのか？
　潜んでいるのか、それともこの世に在らざる者だったり……？
　じいさんは、沈黙したままなにも言わない。
「おい……」
　耐えかねて訊こうとすると、
「はっはっはっ！」
　と、大声で笑い出した。
「本気にしおったか。この部屋には他には誰もおらんわ！」
　腹を抱えて盛大に笑われるとかなりムカツク。
「まあ、それはいい……」
　そう言いながらも、笑いすぎで呼吸が苦しそうだ。そのまま死んでしまえ。
「よくねぇよ」
　一応ツッコんでおかないとな。
「莫迦弟子よ、キヨカを手伝ってやれ」
「……」
　なにを言い出すかと思えば。そんなの決まってるだろう。もとよりそのつもりだったしな。わざわざ、このじいさんに言われるまでもない。
「どうした？　怖気づいたか？」
「違う」
　即答が逆にビビッているように思われてしまった。
「無理するでない。強がりはよすんじゃ」
「はいはい。わかりましたよ。臆病者の強がりでもなんでもいいや。俺はキヨカを守ればいいんだな」

「ほほう……。ちと……いやかなり不安があるが、お前に任せるしかなさそうだしな」
　少しだけじいさんは嬉しそうに笑った……気がした。
「おじいちゃん、トールちゃんの事、ホントに大好きなんだから……」
　と、キヨカが信じられない単語を口にした。
「キヨカ、お前はなにを言ってるんだ？　それとも、俺の耳がおかしくなったのか？」
「お前の耳がおかしくなったんじゃ」
　じいさんは愉快そうに笑いながら部屋を出て行った。
「ったく……なんだったんだ」
　ぽかんとしている俺に、キヨカが再び意味不明な事を言いやがった。
「おじいちゃん、トールちゃん大好きだから」
　聞き間違いだろうか。確かにキヨカは、あのじいさんが俺を好きだと言った。もちろんこの好きはライクであって、ラヴではない。万が一……八百万(やおよろず)が一にでも後者だとしたら、俺はきっと精神が崩壊してどうにかなってしまうだろう。南シナ海あたりで海賊のような裏稼業でもして……いや、無理か。そんな事をしようとして殺されてしまうだろう。だが、じいさんとそんな関係になるよりはその方がマシというものだ。あぁ……想像するだにイヤになる。
「トールちゃん、いっつも反応が面白いから。おじいちゃんもついついいじりたくなっちゃうんだよね」
　それを聞いて少し安心した。と、すぐに俺はオモチャかよ……と思ってしまったりした。

(C)2012 STUDIO SAIX All Rights Reserved.

　さて、とにかく地図の場所はわかった。白西山にあるようだ。
　しかし……山は広い。
　そこで目印となるのが〝畢〟という場所だ。
　その場所なんだが……どこだよ。
　地図に書かれているのは〝昴〟と〝参〟と〝奎〟だけだったりする。
　ヨシマサも言っていたが、西方白虎七宿がなにやら関係しているらしいんだが……あいにくと俺はそれがわからない。
　キヨカは知っているようなのだが……はたしてアテになるのか。不安だ。
　そして……俺の単位も不安だったりする。
　はぁ……あの教授は本当にレポートで勘弁してくるかな……。はぁ〜。
「なあ、キヨカ」
「なに？」
「お前がさっき言ってた天文図ってのはどこにあるんだ？」
「さぁ？」
　即答しやがった。
　天文図がなきゃ意味ないんじゃないか？　手掛かりが見つかっても、こうも資料がないんじゃ意味ないだろ。
　こうなりゃヨシマサに頼んで……て、どうするんだよ。ＦＡＸないしな……。天文図を口頭で説明されてもわからんしな……。
　どうしたもんか。
　やっぱ、じいさんに訊いてみるのが一番早いんだろうな。なんか癪だから訊きたくないんだがな……。
「ところで、じいさんはどこ行ったんだ？」
「さぁ？」
　即答。
「稽古場かな……？」
　とにかく稽古場に行こうとしたのだが……、
「違うと思うよ」
　キヨカがそんな事を言った。
「どうしてだ？」
「だって……おじいちゃんさ、この時間はいっつも外出してるもん。どこ行ってるかは知らないけど」
「……」
　つまり、今この家にじいさんはいない？
　……すると、今この家には俺とキヨカしかいない？

……って事は二人っきり？
しかし、なんだろうか。二人っきりというなんともいい感じな響きなのに、なにも感じない俺。病んでいるのか？　いいや、違うな。これは正常な反応だ。こういうものは誰でもいいというものじゃないだろう？　相手というものが……。
と、なんとなくキヨカを見る。ああ、なんとなくだ。
キヨカは鉛筆をくわえて遊んでいた。
……平和だ。
じいさんに頼れないとなると、自力で探すしかないのか。
つまり、家探ししろって事だよな。
「なあ、キヨカ」
「あに(なに)？」
鉛筆をくわえたまま答える。
「昔、どこで見たのか憶えてないのか？」
「なにを？」
……悪い。省略した俺が悪かった。
「昔、その天文図をどこで見たのか憶えていないのか？」
キヨカはくわえていた鉛筆でズビシと俺を指し、その先を下に向けた。
「ここ」
「……」
言葉ないね。
「この部屋か？」
「そう。この家」
「……」
どうしたものでしょうか。
俺はどうすればいんでしょうか。
「あのなぁ、この家ってのはわかってるの。だから、それをどこで……どの部屋で見たのかってのを訊いてんだ」
「だから、ここ」
キヨカはちょっとご立腹そうに鉛筆で下を指す。
をいをい。なんか話が行ったり来たりしてるようなんですが……。
「って事は、この部屋にあるのか？」
「それはないんじゃない？」
即答だけど疑問系？
「どういう事だよ」
「見たのはこの部屋でなんだけど、それはおじいちゃんがどっかから持ってきたのをここで見たってだけなわけ」
「……」

　どうすればいいんでしょうか。
　これじゃ、完璧に家探し決定の方向なんですけど。
「どこにあるかは……」
「知らない」
　言い終わる前に言い切られた。
　とほほ……。
　ホント、どうしたもんかねぇ。
　これは、西方白虎七宿とやらを知らない俺が悪いのか？
　それとも、そんなもので場所を示した俺のばあちゃんが悪いのか？
　もしくは、その天文図を見た事があるのに憶えていないキヨカが悪いのか？
　いいや、違うね。どれでもないね。
　悪いのはじいさんだね。
　電話代を俺から徴収したうえに、文章を解読するだけして、手掛かりを与えただけでしの肝心な核心を教えずにどっかに行っちまったじいさんが悪い。ああ、そうとも。責任転嫁や八つ当たり……なんとでも言うがいいさ。
　俺はじいさんが悪いと決めつける。それでいいじゃないか。
　とまあ、脳内で暴れたところで、なにかが好転するわけでもなく……手詰まりなのは変わりない。
　かといって、家探しなんかする気にはなれなかったりする。
　そもそも、田舎の家ってのはなにかと物があったりするんだよな。
　この村に限ってだろうが、必ずといっていいほど蔵があって、そこに昔から伝わるなにかが納められているんだが……もちろんこの家も例外じゃない。それどころか、でっかい蔵が四方にあるってのはどうなってやがる？
　それぞれに納められている物が少ないのならまだしも、それぞれほぼ限界量まで入ってるってのはどうなのか。
　確かにガラクタも多いようだけど、マジで価値のある骨董の類が大量にあるらしいし。
　どんな金持ちだよ。
　だからやる気を失くすんだ。
　ホント、やってられん気分にさせてくれる。
　だけど……キヨカが見たという天文図がないと、この〝畢〟とかいう場所がわかるとも思えないし……。
　でも一応。
「なあ、ちなみに訊くが」
「なによ」
「その天文図の配置っていうか、とにかくこの〝畢〟って場所がどの辺なのかとかわからないか？」
「う～ん……」

　キヨカは人差し指を唇にあて、天井を見て考えている。
「どうだ？　思い出せそうか？」
「う～ん……」
　珍しく即答じゃないのな。マジで考え込んでるってのはホント珍しいな。
　しばらく考えて、
「わかんない」
　そうですか。
　結局そうなのね。
　まあ、天文図なんて記憶できてるヤツなんて、それが趣味でもない限りは無理だろうな。
　期待はしていなかったさ。それでも、ちょっとくらいガッカリしたっていいだろ。
　こりゃもう、本格的に蔵の中を探索しないといけないのかね……。はぁ～。げんなりしてくる。
　それにしても、じいさんはどこへ行ったんだ？　逢引き……は、こんな人が少ない村じゃ無理だろう。全員が知り合いだからな……。いくらあのじいさんでもそれはできないはずだ。おそらく。
　ったく……。
　じいさんはいないし、キヨカは頼りないし……。
　あとは……。
　ん？
　あれ？
　困った時のヨシマサ頼み。
　そういや、ヨシマサはこの漢字がなにかを知っていたよな。って事は、配置とかも知ってるんじゃないのか？
　でも電話か……。
　細かな事はわからないけど、ちょっとくらいなにかわかるといいんだけど……。
　まあいい。とにかく掛けて訊いてみるしかないか。
　なにもしないよりはマシという事で。
　というわけで、再び電話を掛けてみる。
　電話代は……さっき払わされたし、じいさんに見つからなければいいだろう。今度は樋口さんが消えていきそうだ。いや、順番からして紫さんか？　しかしな……残念ながら、俺の財布には紫さんはいなかったりする。だとすれば、やっぱり樋口さんか。何故か、新渡戸さんもいるんだけどな。
　いやいや、そんな事はどうでもいい。そもそも、電話代請求の心配をしている時点でかなりの小心者じゃないか。そんな事を考えてどうする。
　これから先、どうなるかわからないってのに。
　とにかく、もう一度掛けてみるしかないだろう。知ってるかはわからないが、こうなりゃ賭けだ。ハズレてもともとだしな。知っていればラッキーってなもんさ。

　そうと決まれば善は急げってなもんで電話を掛けようか。
　と、再びヨシマサに電話を掛けるのだが、プッシュ式に慣れているのでやっぱりこのダイヤル式は面倒くさい。
　なんとか十一桁を回して呼び出し音が鳴る。
　頼むから留守電とかやめてくれよ……なんて考えたのがまずかったのか、
『はい、満仲です。ただいま電話に出る事ができません。非通知発信の方はお名前をお願いします』
　留守電を報せるメッセージが聞こえてきた。
「……」
　マジか。
　留守電とは考えなかったな……。
　あいつは……なにをしてるんだ？
　そんな詮索をしてもしょうがないか。
「俺だ。さっきの事で訊きたい事ができた。メッセージを聞いたら電話をくれ」
　とりあえずメッセージを残しておけばいいだろう。
　ヨシマサの事だから、ちゃんと電話を掛けてきてくれるだろうし。
　とにかく、最後の頼みの綱をおとなしく待っているとしようか。

　とりあえず部屋に戻って地図とにらめっこ。
　じいさんが言うには、これは俺のばあちゃんが書いたものらしいんだけど……もうちょっとわかりやすく書いてくれていてもよかったんじゃないか？　それとも、あえてこういう書き方で、きちんと理解できるヤツにしかわからないようにしたのだろうか。
　もっとも、ばあちゃんとの記憶がないのでどんな人だったかは知るべくもない。
　なんとなく、無駄に好奇心が旺盛で、頭もよかったんじゃないか……と推測できるくらいか。
　なんて、そんな事を推測していてもしょうがない。
　いや待て。
　そんな人ならどんな風に地図を書くだろうか。
　俺はそんなに頭がいいわけじゃないので、なんとなくでしかないのだが、ちょっとしたヒントを隠すために森を作るだろう。
　よく言うじゃないか。木の葉を隠すなら森の中。森がなければ作ればいいーーって。
　だとすればなにか隠されているんだろうけどな……。
　もうちょっと勉強しとけばよかったかな……。でも、学校じゃ教えてくれないよな……。だいたい、なんの勉強だよ。星がどうたらだから……天文学か？
　天文学は……これっぽっちもわからんな。
　中学でちょっとだけそれっぽい事を習ったくらいだもんな……。
「はい、お茶」
　そう言って、キヨカがグラスに麦茶を注いで持ってきてくれた。およ？　気が利くじゃないか

。
「どしたの？　地図とにらめっこなんかして」
　キヨカは隣に座り、自分の分のお茶を美味しそうにグビグビと飲みだした。
　それがとても美味しそうに見えたので、俺もグラスに手を伸ばす。
　ひんやりとしたグラスが心地いい。グラスについている水滴もなんだかいい感じだ。
　昔の家屋なので風通しがよくて夏でも涼しいから忘れていたが、このグラスの冷たさに暑さというものを思い出す。といっても、都会のそれとは違って、心地いい暑さだ。
「あのさ、おれのばあちゃんなら、なにかこっそりとヒントを隠してないかな……って思ってさ」
「ヒント？」
　キヨカがぽかんとした顔で訊き返してくる。
「ああ」
「どして？」
　即答された。ヒントがあったらダメなのか？
「普通、なにかあると思わないか？」
　そう言うと、キヨカは黙って腕を組んで考え出した。
　そこは考えるとこなのか？　そここそ即答でいいんじゃないのか？
　ダメだ……わからん。乙女心はわからんが、キヨカの心もわからん。それとも俺が変なのか？
「この白西山らしい山の山頂に〝昴〟。そのずっと右下に〝奎(とかき)〟。左下に〝参〟って字が書かれてるわけだけど、これってなにかのヒントとか思わないのか？」
　ちょっと補足してもう一度訊く。
　っていうか、一応ヨシマサに電話で訊いた時に読み仮名を書いておいてよかった。でないと〝奎〟は読めない。
「そうかな？」
　やっぱり頷かない。
「どういう事だよ。意味もなく書くとは思えないんだがな。だったら、ヒントじゃないのか？」
「違うような気がするな……」
　あくまでも否定的な意見なんだな。
「じゃあ、お前はどう考えるんだ？」
　そう訊くとキヨカは、そうだな……と前置きして、
「ただの場所じゃないの？」
　そう言い切った。
「そんなヒントとかを、こんな文字に隠すかな……？　だいたい、場所を示しているのだって充分ヒントだと思うけど、トールちゃんが言うよなものじゃないと思うよ」
「……」
　絶句した。
「だいたい、天文図に関係しているなら、位置以外に考えないでしょ、普通」

「……」
　言葉が出ない。
　キヨカに正論を言われまくるとは思っていなかった。
　確かにそうなんだけどな。
「そりゃ、俺だってこれが場所を示すための手掛かりだとは思っているよ。でも……他にもなにかあるかな……とか思っただけじゃないか」
「言い訳にしか聞こえない」
「……」
　しゅん。
　即効で返されると、ぐうの音も出ないね。
　あ、そうだ。言い返す絶好のネタがあるじゃないか。
「お前だって、これが天文図……なんていったか、白虎なんとかだってわからなかっただろうがよ」
「それはトールちゃんも。それに、わからなかったんじゃなくて思い出せなかったの。そもそも、十年とか昔の事をすぐに思い出せるわけない」
「……」
　あれ？　言い負かされた？
　俺って……自らドツボに？
　いや……この敗北は最初から決まっていたんだろうな。じいさんが言った白虎なんとかってのを覚えてないし。
「でもな、この〝参〟とかがわからないとな……」
　なんとかしようと試みたが、
「そんなの天文図を照らし合わせる時の目印じゃん。お空って上下左右決まってないからね。天文図もどこを基準にするかってだけだし」
「……」
　ごもっともです。
　なにを言ってもダメみたいだ。
　もう、なにも言わない方がいいかもしれない。
「というわけで、天文図探そうか」
　キヨカは元気よく言うとスッと立ち上がった。
「おい、探すって……」
「蔵」
　やっぱり即答だった。
　しかも、超端的。
「マジであそこを探すのか？」
　思わず、訊き返さずにはいられなかった。つうか、冗談だと言って欲しかったのかもな。
「うん」

　どうしてそんなに元気に答えられるんだ？　正気の沙汰とは思えない。こいつの感覚は、どうなってんだ？
　漠然とだが、あそこは大量のものがあると記憶している。
「あんな荷物の山、絶対イヤだ」
　誰だってそう思うはずだ。
　なんだかわからんものが大量にあるとこを探すなんてごめんだ。
「そんなに荷物の山でもないよ。五年前に一度全部出して風を通したけど、全部出すのに五日しかかからなかったし」
「……」
　今、なんつった？
　五日？
「ちょっと待て。五日だと？」
「うん」
　笑顔で即答。
　マジかよ……。
　冗談だと言ってくれ。
　頼む。お願いだ。
　しかも、キヨカのヤツ〝しか〟とか言ってるし。こいつの感覚はおかしくないか？
　運び出すのに五日なんだろ？　それを収納するのに単純計算で倍。
　そんな量のものが納められているとこを探すなんて……考えただけで、げんなりだろ？　誰だってそう思うだろ？　そうだよな？　な？
　そう思う俺とキヨカの感覚、どちらが正しいんだろうか。そういう問題でもないんだろうけど……現実逃避しちゃってもよくなくなくない？
　ちなみに、この五日というのは一つの蔵に費やした時間であって、この家には四つの蔵がある。
　想像するのもイヤ。

(C)2012 STUDIO SAIX All Rights Reserved.

　現実とは非情なもので――
「ほら、探すよ」
　そう、俺は今、蔵の前にいる。
　この遠野家にある四つの蔵のうちの一つ、西の蔵だ。
　真っ白なこの建造物がやたらと恨めしい。
　そういや……と思い出す。
　昔――子どもだった頃、蔵を見てみたいとか言って、じいさんにぼこぼこにされた事があった。
　うわっ！　忘れていたかった思い出を思い出してしまった。なんか損した気分だ。今では懐かしい思い出……とか言えればいいんだろうが、残念ながらそうじゃない。今でも最悪の思い出の一つだ。
　まあ、どれもこれもじいさんにぼこぼこにされた事ばかりだが。
　あのじいさんの生き甲斐は、俺をぼこぼこにする事なんじゃないかと思えてくるぞ。
　とにかく、そんな嫌な過去はとっとと記憶の片隅に追いやろう。えいっ。
　今はこの蔵を物色しなけりゃいけないんだしな。これ以上、気持ちを重くしたくない。
「しかしな、キヨカ。勝手に入っていいのか？」
「問題ないよ、わたしは」
「……」
　言葉ないね。
　そりゃそうだ。
　キヨカはじいさんの孫だし、じいさんに猫可愛がりされてるし、確かに問題ないだろうな。だがしかし、俺はどうなんだろうか。
　キヨカの許可があろうがなかろうが、俺はじいさんの制裁を受けるんじゃないだろうか。
　それは勘弁してほしい。
　子どもの頃の制裁は、かなりトラウマになっているようだな。今更ながらに思い知らされた。
　そんな俺を完全にスルーして、キヨカは蔵の鍵を開けている。
　こうなりゃ腹くくるしかないか。どうあがいても結果は同じっぽいしな。
「さあ、探そう」
　仕方ない。あとの事は考えてもしょうがないか。今を生きるのさ。開き直り。
「わかったよ」
　それにしても緊張する。
　あれだけ入りたかった蔵だけど、いざこうして入ると思うとやっぱ緊張する。
　ゴクリと唾を飲み込んで、ゆっくりと一歩を踏み出した。
　途端、冷たい――まるでこの世のものじゃないような空気が俺の身体を貫いた。
　思わず、身体が震える。

　寒気とは全然違う。
　もちろん寒いわけじゃない。
　そう……魂を撫でられたみたいな感じだった。
　抽象的すぎるのは自分でもわかっているのだが、それ以外に表現できない。決して、語彙(ごい)が乏しいわけじゃない……よ。
　それに、決して詩人っぽく……なんて思ってなんかないよ。
　ホントにそうとしか表現できないわけさ。
　それはともかく、蔵の中は意外と整頓されていた。
　五年前に一度整理したとか言ってたし、そもそも、それほど出し入れしてないだろうからな。
　それでも、どこになにがあるのかはサッパリだ。
　なにやら大量の箱が並べられていて区別できない。その箱もほとんどが木箱だった。
　それが細かく仕切られた棚に大量に納められている。
　だいたい、こんなになにがあるというんだ？　他の三つも同じようなものなのだろうか。
　それにしても、でかいな……。蔵といっても、ちょっとした家くらいの大きさがあるもんな。しかも二階建て。
　そこにぎっしりと箱、箱、箱……。
　どこをどう探せばいいものやら。
「トールちゃん、探そ」
　キヨカはどうしてだか楽しそうだ。笑顔なのが不思議だ。
「なぁ、キヨカ」
「なに？」
「こんな大量に箱があるのにさ、うんざりしないのか？」
「しない」
　即答。
「そうですか」
　嘆息。
「だって、障碍(しょうがい)があった方が宝探しって気がしない？　困難の末に手に入れたお宝。これってロマンよね」
「……」
　こいつこそソーヤの心なのかもしれない。
　少女ではなく、少年の心を持っているようだ。
　だってそうだろ？　こういうワクワクって男の子特有じゃないか？　いや、別に女の子が持っていたらダメとかじゃなくてだな、そういうイメージあるだろ？
「そういうわけだから、テキパキ探しましょ」
　ホントに楽しそうだ。満面の笑みで言ってくれる。かといって、片付けが好きなのか……は不明だ。
「了解しました」

　かったるいが探さないわけにもいくまい。俺だって宝探しはワクワクする。するが、こういう地道なのはなしだとありがたい。見つけた時の感動が目減りしようが関係ない。苦労はないに越した事はない。
　とにかく、手を動かさないとなにも進展しないので、とりあえず近くにある箱に手を伸ばす。
「おっ？　意外に重い」
　ちょっと間抜けな声が出た。
　Ａ四コピー用紙の束が五冊ほどの大きさ……そうだな、宅配便でいえば八〇サイズくらい、才数だと一才くらい？　〇．五才くらい？　の木箱なのだが、意外とずっしりとしている。
「なにが入ってるんだ？」
　箱自体が重い……という事はないだろう。ばあちゃんの家の地下でも似たような箱があったけど、あれはそれほどでもなかった。
　おそらくなにか重いものが入っているい違いない。
　ちょびっと期待。
　さて、なにが入っているのか……。
「……」
　はぁ〜。
　中に入っていたのは和綴じの本だった。
　ぺらぺらと見てみるが、字が読めない。どうして昔の人は読みやすいように書いてないんだ。もっと俺でも読めるように書いておいてほしかった。
　読めないし、どう見ても天文図ではないので箱にしまい、元の場所に戻した。
　さて、次の箱は……と、その横の箱を手に取る。これも同じくらいの重さだ。という事はこれも……ビンゴ。やっぱり和綴じの本だった。やっぱり読めない。
　なんだか余計に疲れるんだけど……。

　そんなこんなでしばらく物色したのだが、和綴じの本や巻物をかなりの量見つけたのだが、あいにくと目的のものは見つけられなかった。
　それにしても……いや、考えるまでもなくここは宝の山なのかもしれない、あの教授にすれば。
　もしかしたら、ここを紹介すれば単位もなんとか融通してくれそうな気がする。なんだか賄賂みたいだが、交換条件と思えばいいじゃないか。
　教授は史料を大量に読める。俺は単位を取得して悠々と学生生活を送る事ができる。どちらにも利があっていいじゃないか。これほどの好条件もないだろう。
　よし、戻ったら持ち掛けてみよう。
「トールちゃん、見つかった？」
　奥の方を探していたらしく、奥の方からキヨカの声がした。
「いいや」
「あ、そう」

……即答されると、なんだかとても冷たく感じるのですけど。
　確かに見つけられていないが……その感じだとキヨカも同じだろうに。
「どうする？」
「はぁ？」
　どうする？　の意味がわからん。なにがなんなんだ？　せめて主語か目的語を求める。
「だから、まだ探すの？」
　最初からそう言え。
「そうだな……今どのくらいなんだ？」
　と、腕時計に目をやる。
　探し始めてから二時間ってとこか。そろそろ日も暮れてくる……というのはおかしいか。夏だしな。まだ明るいだろうが、そろそろ腹も減ってきた事だしな。
「今日はこの辺でやめとくか？」
「そうだね」
　と、キヨカも同意した。
　疲れたな……。
　腹も減ったし……って、キヨカもここにいるから誰も晩飯の用意なんてしてないよな。それを考えると余計に腹が減る。
　そんな事を考えながら外に出ようと……、
「へぶっ！」
　思いもよらない衝撃を受けて横に吹っ飛んだ。
　なんだ？　なにが起こった？
　なんか、脇腹がめちゃくちゃ痛い。
　かはっ！　なにがあったんだ……？
　と、周囲を見る前に、
「おじいちゃん」
　そのキヨカの言葉に全てを理解した。
　納得だ。
　あのじいさんなら、躊躇う事なくやるだろう。
「勝手に蔵に入りおってからに……」
　おそらく俺を見下ろしているのだろう。だが、俺は脇腹を押さえたまま動けずにいた。いやホント、マジで痛いんですけど……。
　そういや、俺って蔵に入る前にこういう事態があるかもって考えてたっけ。そのくせ、いざ入ってしまうと忘れてしまったのか。
　完全に俺の油断が招いた失態なのか？　なんか納得できないが……そうなんだろう。
　あぁ、こういう〝自分が悪いんだ〟って考え、日本人ならではなのかもな……。

(C)2012 STUDIO SAIX All Rights Reserved.

　ぼこすかにされつつも、なんとか無事に晩飯にありつけて空腹を満たした。
　あのまま外に縛り上げられて吊るされてもおかしくなかったのだが、どういう風の吹き回しか、じいさんはそれ以上はなにもしなかった。
　それどころか、晩飯が終わったあと、俺とキヨカを呼び出した。てっきり、怒鳴り散らされるものとばかり思っていた俺とキヨカは、目の前の光景がいまひとつ理解できていない。
　じいさんの前には、天文図が置かれている。
　その天文図には〝参〟とか〝昴〟などの文字が書かれている。
「おじいちゃん、これって……」
　キヨカの問いにじいさんは、うむ、と頷いた。
「お前たちが探していたものじゃ」
　やっぱり、としか思わなかった。
　っていうか、じいさんはどうしてこれを用意してくれたんだ？　もしかして、出掛けていたのも、これを取りに行っていたりとか……なんて事はないか。
「ねぇ、おじいちゃんは、これを探しに出掛けてたの？」
　俺の疑問をテレパシーで受信したかのように、片っ端から訊いてくれるキヨカ。なんだか不思議な感じだな。っていうか、同じような疑問をもっても仕方ない状況なんだろうか。
「いいや、昼間はトカキサマのとこに行っておった」
　とかきさま？　なんだ、それ。
「トカキサマって、あのお社？」
　じいさんは無言で頷いた。
　どうやらそのトカキサマ(・・・・・)とやらは、キヨカも知っているのか。お社がどうとか言ってるし、なにか神社みたいなもんか？
　しっかし、そうだとしても、じいさんがそんなとこに行っていた理由が、俺には想像もできない。
「お前がこの天文図を見たいと言っておったからのぅ……」
「もしかして、これって……」
「そうじゃ、トカキサマの社に奉納しておった」
　なんでまたそんなとこに……？
「どうしてトカキサマの社に奉納してたの？」
　またしてもテレパシーか？　テレパ、テレパ。
　気になるので自然と前屈み……違う、前のめりになっていた。
「意味はない」
　……言葉ないね。
　なんだ、それ。
「蔵に納めていても、トカキサマの社に奉納していても、大差ないからのう。どちらも、わし以

外は入れん場所じゃて……本来は」
　と、じいさんがキッと俺を見た。
　確かにこっそりと入ったけど……それは、あんたの孫娘も一緒だろうに、なんて口が裂けても言えないね。命は惜しいからな。
「勝手に入ったのは悪いと思ってるよ」
「だといいがのう。それはともかく、キヨカ、これでその地図を解読してみるといい。公恵さんが描いたものだ。それほど難しいものにはせんだろう」
　すみません。充分難しいです。俺にはちんぷんかんぷんです。
「わかったよ。解読してみるね。ありがとう、おじいちゃん」
　と、キヨカは満面の笑みで礼を言った。
「ふむ、素直で可愛い孫は大好きじゃ」
　そう言うなり、じいさんはキヨカに熱い抱擁をしていた。キヨカは苦しそうにしていたが。

　ともかく手掛かりとなる地図を手に入れた。
　なにか忘れているような気がするが……まあ、いっか。と、地図に向かおうとした時、遠野家の黒電話が鳴った。
「おい、莫迦弟子！　お前あてだ！」
　と、電話に出たらしいじいさんが叫んだ。
　俺に電話？　誰だ？
　俺に電話なんぞ、思い当たる節が……ないな。しかも、ここにだろ。
　……ん？　って、ヨシマサかっ！
　慌てて電話に走る。
　そこにはすでにじいさんはおらず、電話の横に受話器が置かれていた。
「すまん、ヨシマサ」
　電話に出るなりまず謝った。
「お前な……夕方にも電話したんだぞ。ってまあ、最初に出れなかったから、こっちも文句は言えないんだろうけどな」
　と、低姿勢なヨシマサに、ちょっと救われた気がする。
「で、訊きたい事ってなんだ？」
「ああ、それな。もういいんだ」
「……」
　返事はなかった。
「すまんな。天文図が見つかるかわからなかったから、保険としてヨシマサにだいたいの位置だけでも訊いておこうかと思って……」
「……」
「本当にすまん」
「シフォンスペシャルショコラサンデー」

……？
「帰ってきたら奢れ」
「えっと……もしかして怒ってる？」
「いいや。協力した礼として奢れ」
やっぱ怒ってるんじゃないか？　奢れって命令形だし。
「わかったわかった。帰ったら奢る。奢るから赦してくれ。な？」
「シフォンスペシャルショコラサンデーだぞ」
「わかった。そのシフォ……なんとかサンデーだな。奢るって。絶対だ。約束する」
「ならいいか。楽しみにしてる。ああ、楽しみだ。まさかあの一品を食べれる時が来るとはな……さすがに自分で払うのはきついからな……」
と、意味深な言葉を残して電話は切られた。
自分で払うのはきついって言ってたか？
背筋に悪寒が走った。
ちなみに後日知ったのだが、そのシフォンスペシャルショコラサンデーというのは、地元では結構有名な喫茶店シフォンのメニューで、そのお値段は、樋口さんと野口さんが一人ずつと、紫さんが二人必要な代物だった。
ふざけんなっ！

「誰からだったの？」
部屋に戻ってきた途端訊かれた。
ここで、彼女から、とか言ったらどうなるかな……と思って言ってみた。
「ふぅん。で、誰から？」
信じられてないし。
別にヤキモチなんてどうでもいいから、もうちょっとリアクションが欲しかった。
「友達だよ」
「友達いたんだ」
即答でそんな事を言われた。
心になにかがグサリと刺さった。
「お前な、俺だって友達くらいいるっての」
「意外」
また即答。
また心になにかが刺さった。
「お前な、俺をなんだと思ってるんだよ」
「友達のいない孤独なロンリー野郎」
……なにそれ。
俺って、そんな風に思われてたの？　マジでショックなんですけど。
「……非道い」

　立ち直れなくなるかもしれない。
　引きこもりたくなるかもしれない。
「とまあ、そんなのはどうでもいいとして、なんの電話だったの？」
　聞いちゃいない。
「人の話を聞けよ」
「聞くから話してよ」
　……う～ん、なんかこのやりとり納得できん。
　納得はできないが……話さないと進まないんだろうな。
「あの天文図の文字のついて訊こうと思ってたんだよ」
「どして？」
　即答で返されてもな……わかりきった理由を説明しなきゃならんのか？
「もし天文図が見つからなかった時のために、だいたいの位置を訊こうと思ったんだよ」
「保険？」
「そうだな」
「ふぅ～ん」
　おいおい、なんだその反応は。どうすりゃいいんだ？　対応に困るじゃないか。
「それじゃその電話は意味なくなっちゃったね」
「そうだな」
　確かに意味はなくなったが、もしなにかわからなくなったら訊くつもり満々だ。なんとかサンデーとやらを奢らされるわけだしな。
「そんなどうでもいい事は本当にどうでもいいから、この地図をなんとかしようよ」
　そうだった。
　まるで他の女性と楽しく電話をしていたのがバレてしまった彼氏のように、さっきの電話をどう説明しようか考えてしまった俺。どうしてこいつに言い訳なんぞしなきゃいけないんだ。詮索される理由はないし、そういう関係じゃない。
　おっと、そんな事よりもこの地図だったな。
　山頂は白西山の事だとして……あとの文字だよな。
「これって、トカキサマの事じゃない？」
　そう言ってキヨカが指したのは〝奎〟だった。
　確かにそれってそんな読み方したな。
　そういや、じいさんもおばあちゃんはそんなに難しいものにはしないと言っていた。だとすれば、結構単純に考えるのがよさそうだ。
「なるほど……って事は、これは……？」
　そう言って俺が指したのは〝参〟だ。
「えっと……なんて読むんだっけ？」
「えっとだな……」
　単純に〝さん〟じゃなかったはずだ。

俺も忘れてしまっていたので、ヨシマサからの電話中に走り書きしたメモを解読する。
か……〜……てき？
俺の莫迦！　もっと綺麗な字で書けよ。読めないじゃんか！
「からすき……そうか、そうだったね」
と、その走り書きを覗き込んだキヨカが言った。
おいおい、どうして書いた本人が読めないのに読めるんだよ。
そんな疑問は放置プレイにしておいて、読めたのだから問題なし。
「からすきって地名、ないのか？」
「からすきね……」
キヨカは腕を組んで天井を見上げて考え始めた。
そんなに地名って出てこない……よな。自分に置き換えて考えてみたらやっぱ出てこなかった。そんなもんか。
「えっと……えっと……」
越冬ツバメ。と心の中でキヨカの言葉に付け加える。
「そうだ、唐漉(からすき)池っていうのがある」
「カラスキ池？」
そんなのあったっけか？
俺だって、昔はここで夏休みとか過ごした事があるけど、そんな池知らないぞ。
「知らない？　って、そうかもね。地元の人しか知らないかもかも」
ちょっとひょうきんに言われてもな……。
「そんな池あるのか？」
「えっとね……白西山の北の方の麓にね、洞窟があるんだよ。その洞窟の奥に池があるんだよ」
「池？　湖じゃなくて？」
「うん、池」
なんだかそういう所って、地底湖ってイメージがあるんだけど……。
「確か、そこの名前が唐漉池って名前だった」
なるほどね……。
地図を広げて場所を確認する。
地図には、トカキサマの社の位置は書かれているが、その唐漉池はもちろん書かれていない。
っていうか、トカキサマの社って白西山の南西の麓にあったんだ。知らなかった。
それよりも唐漉池の場所だったな。
「どの辺かわかるか？」
「うん。ここ」
と、キヨカが指した所に……書き込もうと思ったが、じいさんの所有物に勝手に書き込むとどうなるのは火を見るより明らかなので憶えておく事にする。
そして、おばあちゃんの地図と照らし合わせる。
山頂がここで、トカキサマがここで、唐漉池がここ……となると、目的地は、ここだ。

　指示語ばっかですまん。
　その目的の場所は、白西山の北東辺りだと思われる。大雑把なので詳細はわからないが、とにかくそこに行けばなにかわかるかもしれない。
「これで場所はわかったね。明日は探検だよ」
　と、キヨカはほくほくの笑顔だ。
「そうだな」
　実は俺も楽しみだったりする。
　なにせ宝探しだ。なにがあるのかワクワクしてくる。
「じゃあ、今から明日の準備だね。で、明日は早朝から出発だよ」
「了解」
　というわけで、早速明日の準備に取り掛かる……て、なにを準備しろと？　山登りの道具なんてあるわけないじゃん。
　そんな事をぼやくと、それは用意しておくから、とキヨカが言ったので、じゃあ俺が準備するものは特にないな……。
　とにかく寝よう。
　眠れたらの話だが。
　やばいな……興奮して眠れそうに……。

(C)2012 STUDIO SAIX All Rights Reserved.

「起きろっ！」
　腹部に衝撃を受けて目が覚めた。というより、強制的に覚まされた。
　一瞬、呼吸ができなかったぞ。
　がはっがはっと咳き込みながら身体を起こす。
「いつまで寝てるか！」
　そう怒鳴られたあと、筆舌できない罵倒の言葉を浴びせかけられまくった。
　なんて憂鬱な目覚めだろうか。
　それにしても、熟睡してしまっていたのか……。
　ところで、今は何時だ？
　枕もとの腕時計を見ると、まだ四時だ。しかし、空は明らんでる……ような気がする。
「もう、早朝から出発だって言ったでしょ！」
　確かに言ったが……。
「なのに、どうしてまだ寝てるの！　私なんか、二時起きだよ！」
　どんだけ早起きなんだよ。
「というわけで、しゅっぱ〜つ！」
　俺の腕を掴むと、布団から引きずり出された。
「わかった。わかったからとにかく放してくれ」
　仕方ないな……と、なんとか手を放してくれた。
「一分後に出発ね」
　そう言うと、キヨカはすたすたと玄関の方に歩いて行った。
　おいおい、それは無理だろ……とか思いつつ、寝惚けた頭のまま、できる限りの最速で着替えを済ませて玄関に向かう。
　と、そこにはぷんぷんと仁王立ちしているキヨカがいた。
「遅い！」
　言われると思った。
「あのなぁ、無理だろ、一分は」
「そんな事ない。……って、そんなくだらない事を言ってる時間はもったいないから、早く行きましょう」
　そう言って、リュックを渡された。
　ずしりと重い。そりゃもう……かなり。
「それと、これね」
　そう言って木刀を渡された。
「こんなもんどうするんだよ」
「私の護衛だから。それに、あればなんにでも使えるでしょ。あ、でも、杖として使うのは厳禁ね」

ちっ。絶対杖にしてやろうと思ったのに……。
「というわけで、出発！」
やたらと元気なキヨカについて、明らみ始めた空の下、白西山へと向かった。

さて、白西山の麓まで三〇分歩き通した。
巨大なリュックを背負っての行軍は、なかなかの重労働だった。ちなみにキヨカは、小さなリュックを背負っているだけだ。
なんか不公平な気もしなくはないが、不平を言ったところで、男の子でしょ、とすまされてしまうのが目に見えているので、なにも言わないでおく。
さて……地図を広げて場所を確認する。
今いるのが、キヨカが言っていた唐漉池があるという洞窟の近くだ。こんなとこに洞窟があったんだ……と感動していた。
なんとなくだけど、宝探しといえば洞窟というイメージが俺の中にある。
一応持っていたレンズ付きフィルム（三十九枚撮り）で撮っておく。なにせ、レポートを書かなきゃ、俺の単位がかなり危険だからな。まあ、こうしている現在でもレッドゾーンだし。教授の呼び出しを無視してここにいるんだから。これはせめてもの抵抗だ。
「早く行こうよ」
と、キヨカに急かされ、山に足を踏み入れた。
そんな表現をすると物々しく感じたりするのだが、それほど大きな山じゃないし、俺が子どもの頃に何度も遊んだ場所でもある。なので、意外と気楽に登れるのだ。
しかし、計算外だったのはこの荷物。
重い。
負担になりまくりだ。
なにが入ってるんだ？
なんだか、かなりの重装備がありそうだな。どこのサバイバルなんだか。
確かに、近くの山だからといって油断は禁物なんだろうけど、限度って……いや、転ばぬ先の杖って言葉もあるからな。念には念を、だろう。
遭難とか考える前に、俺の体力が尽きそうだ。
ガキの頃はあんなにはしゃぎまくってたのにな……体力なくなったか？
そんな事をぶつくさと考えながら草を掻き分けて登っていく。
あぁ、鬱陶しい！
夏だからって事で半袖しか持ってきていないわけさ。つまり、山登りにはかなり不適当な格好になってるわけさ。
キヨカはきちんと長袖のパーカーを着ているというのがさらに不公平感を醸し出している。
しかも、ここにきて木刀が邪魔になってきた。つうか、最初から邪魔だ。
なんとかこいつで草を掻き分けるのだが、草は反動で戻ってきやがるのであまり役に立っていない。疲れるだけだ。

ルートとしては、一度頂上に行ってから、方角を確認して降りていくらしい。
キヨカがそう言ってるんだから従うまでだ。
それにしても、遊び慣れた山とはいえ、久しぶりに登ると大きく見えるものだな。あの頃の方が小さく見えていた気がする。
ちょびっと感慨に耽りながら、えっちらおっちらと山を登っていく。
何度もキヨカに急かされながらも登っていくと、昼頃にはなんとか頂上に辿り着いた。
「ふぃ〜」
と、大きく息を吐き、近くにあった石に腰を下ろす。
ホント疲れた。
これで睡眠不足なら確実に昇天していたろうな。実際、あんな時間に起こされて、ちょっとヤバイ感じなんだが。
「ほら、トールちゃん、のんびりしてないでさっさと荷物からアレを出す」
せっかく休憩していたのに……。
とか思いつつも、リュックをがさごそとするのだが……アレってなに？
「おい、キヨカ……」
「あーもー！　遅い！　遅すぎる！　のろまなタートルさんめっ！」
一人でぶつぶつ言いながら、俺を押しのけてリュックの中をあさりだした。
「ちゃんと運んできたんでしょうね……。ぐずぐずになってたらトールちゃんのせいだかんね」
なんの事やら。わかるように説明してもらいたいものだ。
そもそも、この荷物は全てキヨカが用意したものだから、俺はなにが入っているのか知らない。丁寧に運ばなきゃいけないものがあるなら最初に言っておいてもらわんと……。
「あった！」
と、リュックの底の方から銀色の箱を取り出した。
キヨカはそれを高々と掲げて、
「お弁当！」
と、叫んだ。
なるほど弁当か。そういや、腹減ったな。
「というわけで、これはトールちゃんの分ね」
と、その銀色の箱を渡してくれた。
おおっ、弁当とはありがたいじゃないか。こうして俺の分を忘れずに作ってくれるなんて……。なくても文句は言えない状況だったのにな。すっかり食事を忘れていたわけだし。
「サンキュ」
そう言って受け取る。ずしりと重さがあるので空ではないようだ。当たり前か。いいや、キヨカの場合、なきにしもあらずだからな……。とにかく、中身は入っているっぽいので一安心。
なんとまあ、アルマイトの弁当箱ではないですか。ドカ弁とかいうんだっけか？
「私のはこれ」
と、自分の手荷物からバスケットを取り出した。

「というわけで、いっただきまぁす」
　と、キヨカはバスケットを開けてもしゃもしゃと食べ始めた。へぇ〜、サンドウィッチか。そんなの作れるんだな。
　って、よく考えれば、適当に野菜とかハムとかをパンに挟めばいいだけか。適当なものなら俺も作った事があるな。本当にレタスとハムを挟んだだけだが。
　それにしても、人が食べてると美味しそうだな……。
　おっと、俺も弁当があったんだった。なんだろうな。俺のはパンじゃなくて普通の弁当っぽいけど……。あいつもマメだな。パンとご飯、両方の弁当を作るなんて。どっちかを二人前作る方が楽だと思うんだけどな。
　さて、俺の弁当の中身はなぁにかな。
　カパッと弁当の蓋を開ける。
「……」
　一瞬、言葉を失う。
　な、なるほど……こうきたか。
　これは、どこぞの国旗か？
　敷き詰められた緑色の真ん中に梅干。この緑色のものは……菜の花か？　菜の花を塩漬けしたものっぽいな。
　念のためその下を見ると、ちゃんとご飯が敷き詰められている。ちゃんとご飯があってよかった。
「どしたの？　キヨカちゃん特製バングラディッシュ国旗弁当だよ」
　サンドウィッチを頬張りながらキヨカが言う。
「……」
　……言葉ないね。
　ご飯の上に梅干という日の丸弁当じゃなくて、どうしてバングラディッシュにしたのかは甚(はなは)だ疑問だが、特に意味はなさそうだ。日の丸弁当だと不満たらたら言われそうだとか、こっちの方が面白そうだとか……そんなとこだろう。
　しっかし、キヨカもくだらん事をしやがる。
　確かに日の丸弁当よりはちょっと嬉しかったりする。
　それに、作ってもらっておいて文句を言うものじゃないよな。
「いただきます」
　俺は両手を合わせてから食べ始め……食べ始め……あれ？　箸がない。
「キヨカ、箸は？」
「ん？」
　サンドウィッチを頬張ったままこっちを見る。
　そのくわえていたものを、はぐはぐと食べると、
「あ、忘れてた」
　と、にぱぁっと笑って言い切った。

「私のお弁当これだったから、すっかり忘れてたよ」
　てへへ、と笑って誤魔化された。
「その辺の枝をお箸代わりにしたら？」
　俺は断固拒否した。
　そんな事したら下手すりゃ死んでしまう。
　その変の枝を箸や串の代わりにして死んでしまう事だってあるんだ。
　毒草ってのは、意外と身近にあるもんなんだよ。特にこういう山の中は、危険極まりない。気軽にその辺のものを口に入れでもしたら、命に危険は目の前だ。
　こんな所で死ぬのは御免だ。それが、箸を忘れて……なんて理由なのは、なんだか恥ずかしいだろ。
　仕方ない。手で食べるか。

　ともかく、腹は満たされた。
　きちんと、ご馳走様、と言って弁当箱をリュックにしまう。キヨカは、お粗末様でした、とニコニコだ。
やっぱ、言われるのって嬉しいよな。
　普段は自分のためにしか作らないけど、誰かに作って、美味しそうに食べてもらえると、嬉しいわな。
　キヨカの弁当は、ご飯と漬物だけだったけどな。
「さあ、日が暮れる前に見つけるよ！」
　食後の休憩もそこそこにキヨカは歩き出した。
「おい、ちょっと待てって」
　慌てて荷物をまとめて追いかける。
　もうちょっとゆっくり……とも思ったが、確かに日が高いうちに見つけないとまずいな。夜の山は危険だし。
　ふぅ〜、少しは荷物も軽くなった……というわけでもないな。弁当一つでそんなに変わらないし。腹が重くなったし。
　っていうか、あいつは方位磁石なしでさくさくと下りて行くなよな。ちょっとは確認しろって。
　えっと……地図を広げて確認すると……あってる。野生の勘なのか？　もしくは、なにかに引き寄せられているとかそういうのなのか？　とにかく……って、地図を見てるだけでもおいてきぼりですか。
「トールちゃん、遅いよ」
　なんて催促される始末だ。
　まったく……。
「はいはい、わかりました」
「はい、は一回！」

やれやれ……そんな事を言われるとはな。
了解、と言いつつ足早に追いかける。
重い荷物に邪魔にしかなっていない木刀。さらには下りの山道という状況で急ぐと……、
「うわっとっとっと……」
思わずそのまま転げ落ちそうになる。
危ない危ない。
「なにやってんの、ドジっ子」
……ドジっ子って言われた。
ドジっ子って……。
キヨカに……。
なんか男の子としてショックなんですけど。
心に深い傷が……。
「おいてくよぉ〜」
と、なんだか遠くから声が……って、もうあんな先にいるし。見失う直前って感じだ。こんなとこではぐれるのはちょっと嫌だぞ。心細いとかじゃなくて、戻るに戻れないだろ。キヨカを一人にして戻るわけにはいかないからな……一人で捜索――いや、俺が捜される羽目になるのかもしれないが、ともかくそんな面倒な事は勘弁だ。だいたい、そんな事になれば、じいさんに半殺しにされるだろうな。それでも、キヨカが無事なら嘲笑われるくらいですむかもしれない。屈辱だがな。
って、そんな事を考える暇があるならキヨカを追いかけないと。こんな妄想を現実にするなんて真っ平御免だ。
えっちらおっちらと足元に気をつけながらできるだけ速く走る。なんだかんだでキヨカは待っていてくれたようで、思いの外早く追いつく事ができた。
しばらく山を下りていたのだが、それらしいものは見つからない。
もっとも、目印があるかどうかすらあやしい。そもそも、見つける対象がわからないんだから、それらしい目印がないとお手上げなんだがな。
地図を見ても、今いる場所がだいたいその場所だ。あくまでもだいたいなので誤差はありまくりだろうが。あの地図も大雑把だったし、これも大雑把な位置だからな……。大雑把と大雑把の組み合わせで緻密なものを期待するのは無理だろう。マイナスとマイナスを足してもマイナスだからな……。掛ければ別だろうが、この場合は意味がよくわからない。そもそも掛けるってどうするのさ。つまり〝加減乗除〟でいえば〝加減〟しかできないんだよな。
「なにか見つかった？」
目印らしきものをキヨカの命令で探していたのだが、やっぱり見つからない。
「なんもないな」
「ちゃんと探しなさいよね」
非道いな。
「ちゃんと探してるって」

「そんな弁解してる暇あるなら探す！」
　反論は認めないってか。どこの独裁者だ。それに従う俺も俺なんだけど。
　それにしても、探すものがわからず探すってのはどうなんだろうか。今更そこに疑問をもったら終わりだろうな。禁句だ。タブーだ。禁止用語だ。禁則事項だ。
　しかし……草で腕を切ったりしてるんだが……。半袖最悪。やっぱ、こんな山に半袖で登るのは間違いだよな。でも、こういう予定はなかったからな……真夏に持ってくるヤツなんて……いるか、普段から長袖しか着ない人とか、日焼け防止のために……とか。
　だけど、俺は半袖なんだよな。
　こればっかりはどうしようもない。
「あ、あった」
　えっ？　なに？
　俺が半袖と長袖について後悔しているとキヨカの声が。あったって、なにが？
「どうしたんだ？」
「ほら、あそこ……」
　と、キヨカが指差したのは三〇メートルほど下りた所だった。そこには――
「洞窟？」
　なんかそれっぽい洞窟らしきものが見える。ただの洞穴(ほらあな)のようにも思えるし……って、あれ？　洞窟と洞穴ってなにが違うの？　一緒じゃんね。俺、興奮のあまりか疲れのあまり変な言葉になっとる？
「ほら、おいてくよ」
　と、俺が脳内混乱しているうちに、キヨカはさっさとその洞窟に走っていった。元気だな。
　のそりのそりと、重い荷物を背負い、草で身体をずたずたにされつつそれを追う。なんか健気だね、俺。

(C)2012 STUDIO SAIX All Rights Reserved.

　目の前の洞窟はなかなか立派だった。どうしてこれがすぐに見つからなかったのかといえば、穴の周囲が草で覆われていたからだろう。まるで入り口を隠しているようだ。
「というわけで、中に入る準備」
　なにが、というわけ、なのかは謎だが……って、準備と言われてもそれも謎だ。
「ほら、さっさとする」
　と、背負っているリュックを無理矢理奪い取られる。そして中をがさごそ。
「えっと……これと、これ……と」
　ぶつぶつ言いながら取り出したのは、あのライトがついたヘルメットを二つと、キャンプなんかで使うランタン一つだった。
　こういう準備は万端なんだな。まあ、あの地下室の事があるし、こういう状況も想定済みなのだろうか。
　とにかく無理矢理ランタンを持たされ、背中を押される。
「ちょっと待て。背中を押すな」
「臆病者(チキン)？」
「……」
　なんだ、これは。言い返せないというか、言い返すとなんだか問題のような気がする。どうしたらいい？
「ほら、さっさと行く！」
　と、突き飛ばされた。
　俺は前につんのめりそうになる。というか、派手に転んだ。
「ドジっ子」
　また言われた。
　これはドジとかそういうものじゃないと思うんだがな。いきなり背中を押されたら……というか、突き飛ばされたらそうなるっての。
「早く行ってよね」
　と、ぐいぐいと背中を押される。
「もしかして怖いの……がっ」
　鳩尾(みぞおち)にきれいに一発決まった。一瞬、呼吸ができなくなる。
「……殴るよ」
　低く小さな声で言われたのだが……もう殴ってる。だから、なんのコントだ？　お約束というものなのか？
「さあ、きっとこの先にあるんだから、早く見つけて帰ろうね」
　怖いほどの笑顔だった。俺は頷くしかできなかった。

　しかしなんだろうか……。

この状況を俺はどうすればいいのだろうか。
キヨカは、俺のシャツの裾をちょんと持っている。本当は怖いのだろうか。あれは怖さを誤魔化すため……とか妄想しちゃうぞ。
ちょっと色んな意味で、ドキドキしながら洞窟の中を進んでいく。
ランタンの明かりしかないのだが、これがなかなか明るい。なので、ヘルメットのライトは点けていない。
それにしても、結構長いよな……。そろそろ五分は歩くぞ。曲がりくねったりしているので、感覚や方向がいまいちわからない。そもそも進んでいるのかすら怪しい。もしかしたら、同じ所をぐるぐるとしているのかもしれない。そんな不安に駆られる。
けどまあ、とにかく進むしかないわけだ。分かれ道がないだけマシだと思う。これで分かれ道だらけだったら、二度とここから出る自信はないね。そんな自信はいらないのだが、事実そう思えるんだからしょうがない。
「まだかな」
と、背後から弱々しい声がした。
ああ、いっつもこれくらいしおらしくしていてくれればいいのに……と思う。
「どうだろうな。どこまで続いてるんだか、さっぱり見当もつかん」
地下道にしても、どこまで続いてるんだ？　結構歩いたのに、まだまだ続いている。そもそも、これって自然にできた道なんだろうか？　かなり疑わしいな。誰かが意図的に作ったとしか思えない。もしそうだとすれば誰がなんのために？　それはやっぱり、あの地図に書かれたものを隠すためだろう。つまり、あれに書かれているものはこのくらいしないとダメという事か。金銀財宝を期待しちゃったりしちゃう？　しかし、本当にそうなら罠のひとつやふたつありそうだよな……。そういうのはなく、ただ延々と道が続くだけってのもおかしいか。それとも、俺がそういう物語の読みすぎか？　実際はそんな事ないよな。でも、なんだかそのうち壁からなにか出てきたり、道の先から岩が転がってきたり……と、なんだか容易に想像できるのがイヤだな。
ぶんぶんと頭を振って、その考えを振り払う。
とにかく今は進むしかないんだよな。

それからさらに五分ほど歩いて、ようやくそれらしいものを見つけた。
目の前には木で作られた扉がある。
なんだか緊張してきて、ごくりと唾を飲み込む。
キヨカも緊張しているのか裾を掴んでいる手に力が込められている。
「キヨカ……開けるぞ」
声を掛けてから扉に手を掛ける。
キヨカが頷くのを確認して、ゆっくりと扉を押した。
重いのかと思いきや、意外とあっさりと開いたので、逆に拍子抜けしてしまう。
ドキドキしたまま開けきると、中はしんと静まり返っていた。いや、もちろん誰もいないんだから静かなのは当たり前なのだが、なんだか空気までもが止まっていたみたいだ。そう――この

部屋の時間が今まで止まっていたような錯覚に陥る。
　そんな部屋には、中心に石で造られた箱――石棺とでもいうのだろうか、それが厳(おごそ)かに鎮座(ちんざ)している。荘厳(そうごん)な光景……とでも表現すればいいのだろうか。とにかく、なんだか神秘的だった。
　一歩一歩を確かめるように、ゆっくりと近付いていく。心臓が口から飛び出そうなくらい緊張している。掌は汗でびっしょりだ。こんなに緊張した事って今までなかったかもしれない。
　初めての緊張に頭の中が真っ白になりそうだ。シャツの裾を掴んでいるキヨカがいなければ、俺は魂が抜けてしまったように突っ立っていた事だろう。
　結果的に、キヨカが掴んでいるってのがよかったのかもしれないな。
　ゆっくり近付いて、ようやく石棺の所までやってきた。
「キヨカ、これがあの地図にあったヤツかな？」
　緊張のあまり、当たり前としか思えないような事を訊いてしまう。うわ、また莫迦にされる……と思ったのだが、
「そ、そうなんじゃないかな」
　と、普通の返事だった。どうやらキヨカもかなり緊張しているようだ。
　その問題の石棺なのだが、一メートル四方くらいの大きさだろうか。それほど大きくない。むしろ小さい。最初は部屋の雰囲気に圧倒されて大きく見えたのだが、実際はそうでもないようだ。
　で、その石棺の蓋にあたる箇所には、蜘蛛の巣を思わせる紋様が彫られている。厳密には蜘蛛の巣ってわけじゃなく、八角形に対角線が引かれたような模様だ。
「トールちゃん……開けてみよ」
「あ、そ、そうだな」
　恐る恐る石棺に触れる。ひんやりとした石の触感だ。別段、変わった感じはしない。
「開けるぞ……」
　と、ずらそうとするがびくともしない。
　あれ？　これって持ち上げるのか？
　そう思って持ち上げようと……持ち上げようと……持ち上がらない。
「トールちゃん？」
　キヨカがじと目で見てくる。
「すまん、手伝ってくれ」
「しょうがないな……」
　嫌そうな口ぶりだが、素直に手伝ってくれる。
　そして二人で、んしょっと持ち上げようとするのだが、やっぱり持ち上がらない。
　やっぱりずらすのか……と思って力を入れるのだが、やっぱり動かない。
　どうなってるんだ、これ。
「ねぇ、もしかしたら合言葉じゃない？」
　キヨカがある意味正論のような、それでいて突拍子もない事を口にした。

　合言葉？
　そんなんありか？
「とにかくやってみよー！」
　と、俺の意見は聞くはずもなく、早速行動にうつした。
「開けゴマ！」
　オーソドックスな合言葉だな。しかし……というか、やはりなんの変化もない。
「う～ん、違うのかな？」
　しばらく考えたあと、
「開け胡麻油！」
「……」
　言葉を失った。そうくるか。だが、やはり変化はない。
「こうなったらーー」
　と、キヨカはその後も、胡麻和えとか、胡麻味噌とか、胡麻団子とか、胡麻塩とか、胡麻豆腐とか、胡麻ダレとか、とにかく胡麻がつくものを思い浮かぶままに言っていった。よくそんなに出てくるよな。キヨカの語彙(ごい)の豊富さに感嘆だね。
「開け胡麻斑海豹(ゴマフアザラシ)！　……違うの？　じゃあ、開け胡麻鯖(さば)！」
　なんの反応もない事に悔しがりつつ、キヨカは諦める事を知らないかのように挑んでいた。っていうか、まだ出てくるのか。
「開け鯵(あじ)！　開け鮪(まぐろ)！　開け鰯(いわし)！　開け鰹(かつお)！　開け鯑(かずのこ)！　開け鯛(たい)！　開け鱸(すずき)！　開け鮎(あゆ)！　開け鮭(さけ)！　開け鮫(さめ)！　開け鯒(こち)！　開け鰡(ぼら)！　開け鰆(さわら)！　開け鯣(するめ)！　開け鰍(かじか)！　開け鮗(このしろ)！　開け鰈(かれい)！　開け鮃(ひらめ)！　開け鰤(ぶり)！　開け鮑(あわび)！　開け鮹(たこ)！　開け鯨(くじら)！　開け鰯(あさり)！　開け鮒(ふな)！　開け鮠(はや)！　開け鯱(しゃち)！　開け鰰(はたはた)！　開け鰊(にしん)！　開け鯰(なまず)！　開け鰌(どじょう)！　開け鰻(うなぎ)！　開け鱧(はも)！　開け鯉(こい)！　開け鱒(ます)！　開け鱚(きす)！　開け?(えい)！　開け?(むつ)！　開け鮟鱇(あんこう)！　開け鮴(ごり)！　開け?(かます)！　開け?(さより)！　開け鰒(ふぐ)！　開け?(わかさぎ)！　……ハァハァ」
　と、何故か思いつく限りの魚……いや魚じゃないのもあるか。魚偏の魚介類を思いつくまま言い放ったのだが……当然ながら反応なし。
　つうか、どうして魚になったんだ？　胡麻だったんじゃないのか？
　えっと……そうそう、胡麻鯖からか。しかし、よくもまあこんなに出てきたもんだね。感心するね。
　それにしても、なんだか鮨が食べたくなってきた。

(C)2012 STUDIO SAIX All Rights Reserved.

　思いつくままに言い続けたキヨカは力尽きてその場に座り込んだ。
「お疲れさん」
　俺もキヨカの横に座る。
「お魚じゃないのかな……鳥かな……？」
　いやいや、そういう問題じゃないと思うぞ。
「鳥も違うと思うぞ」
「そうかな……。試してみる価値はあると思うんだけど……」
　そんなもんか？　しかし、鳥ってなにがあるかな？　雀とか燕とか鶏くらいしか思いつかないぞ。知識が貧困かな……。
　それにしても、どうすればこれは開くんだろうか。
　蓋は、ずれないし持ち上がりもしない。これって、単純に力不足なのか？
　呪文……も効果なし。
　あとは……なんだろうな。絡繰(からくり)なのかな？
　他になにか考えられる事は……思い浮かばない。
　キヨカは再び挑戦しようと立ち上がった。俺もそれに倣(なら)うように立つ。
「他に合言葉っぽいのは……う～ん……」
　腕を組んで考え込む。っていうか、そこまで考えるような事か？　呪文とやらにこだわりすぎてませんかねぇ？　呪文で開くって決めつけてるような……。確かにそれくらいしか思いつかないけどさ。
　それに、呪文だとしても言葉なんて数え切れるわけないし、そもそも日本語だとは限らないわけだしな。そうだよ、日本語だと限らないじゃないか。日本語、中国語、韓国語、イギリス語、フランス語、イタリア語、ドイチュ語、ギリシャ語、スペイン語、ポルトガル語、オランダ語、ロシア語、インドネシア語、スワヒリ語にサンスクリット語……エスペラント語って可能性もある。他にも言語は数多くある。
　そんなの無理だ。組み合わせなんかを考えたらそれこそ無限。しかも、それが意味がある言葉だって確証もない。
これはなにか手掛かりがないと絶対に無理だ。気が遠くなる。つうか、不可能だ。
「なぁ、キヨカ……」
　それをわからせようと声を掛けようとしたら、天井からなにかがつぅーっと下りてきた。キヨカはどうやらそれに気付いていないようだ。
「開け……開け……」
　ずっとなにを言おうか考えている。
「キヨカ、蜘蛛(くも)」
「開け……蜘蛛。えっ？　蜘蛛？」
　キヨカは上の空で呟く。その目の前に件(くだん)の蜘蛛が下りてきた。

　さぞかし驚くのかと思いきやーー
「蜘蛛さんだ。可愛い」
　と、掌で受けて愛でている。
「……」
　俺が驚いた。
　普通は驚いて慌てふためくものだろ？　なのに愛でている……。衝撃的な光景だった。
　しかし、本当の衝撃はその後だった。

　ーーゴトッ！

　低い音がした。
　まるで石が動くような……って、石が動く？
　反射的に石棺を見る。
　石棺の蓋が動いてるんですけど……。
　えっと……どうして？
　なにがあった？
「蜘蛛さん可愛い」
　と、そんな変化に気付かず、キヨカは蜘蛛を愛でていた。
　マイペースすぎる。
　いや、俺も大概マイペースかもしれんな。
　それはともかく、あの石棺だ。
　ゆっくりと蓋が開いていっている。
　マジで合言葉だったとか？
　そんなのも今はどうでもいい。
　とにかく石棺の蓋が開いている事が……って、同じ事を繰り返してないか、俺。落ち着け。落ち着くんだ。深呼吸、深呼吸。
　すぅ～はぁ～。
　そんな間にも石棺の蓋は開いていている。
　そしてーー

　ぶわっ！

　と、黒いなにかが飛び出していったのと、

　どんっ！

　と、石棺の蓋が地面に落ちたのが同時だった。

　な、なんだ？
　その音に、思わず尻餅をついてしまう。さしものキヨカも無視できずに石棺を見る。
「ど、どうしたの？」
　蜘蛛を愛でていて見ていなかったようで、なにが起こったかわかっていないようだ。っていうか、ずっと見ていた俺も、なにが起こったのかわかっていないんだがな。
「わ、わからん……」
　なんとかそう答えるのが精一杯だった。
　誰か解説してくれ。
　いったいなにが起きたんだ？
　あの石棺の中から出てきたのってなんだったんだ？
　わからない事だらけ……というか、わかる事がない。
　どうしたものか茫然としていると――
「……え？」
　石棺の中からなにかが出てきた。っていうか、触角のようなものが見える。
　と、すぐに真っ黒い物体が現れた。
　そいつは、小中大の団子を繋げたような身体で、真ん中の中の団子から三対の脚が生えている。でもって……三メートルくらいはあるんじゃないだろうか。俺よりも格段にでかい！
　石棺から現れたそいつは、触角を動かしている。
　俺とキヨカは反射的に壁にへばりつくようにして息を殺す。
「トールちゃん、あれ……なに？」
　キヨカが小声で訊いてくる。
　訊かれてもわかるかよ。
　心の中で返答する。というのも、声が出ない。
　情けないヤツだと笑ってくれ。
　腰抜けだと罵ってくれ。
　なんと言われても構わない。実際に腰が抜けて動けないんだから。
　ぶっちゃけ、怖いし気持ち悪い。
「トールちゃん……こっち来るよ」
　キヨカの声が震えている。
「あ、ああ」
　なんとか声を絞り出す。
　黒いヤツは、俺たちの存在を察知したのか、こっちへと歩いてくる。といってもそんなに広い部屋じゃない。既にほとんど目の前だ。
　な、なんとかしないとまずいよな……と思うものの、身体が動かない。むしろ、このまま気絶したいくらいだ。目が覚めて夢でした……だったらどれだけいいか。
　そうだよ。こんなの夢さ。目が覚めたら布団の中に決まってる。
　とかなんとか現実逃避をしていると、妙に冷静になってきた。恐怖も限界を超えると感じなく

なるものなのか？

そういや木刀を持っていたんだっけと、木刀をぎゅっと握って構える。

今なら勝てそうな気がする。剣豪になったような気分だ。錯覚かもしれんがな。

と、そんなのはやっぱり気のせいだった。

黒いヤツの脚が迫ってきたかと思うと、俺は吹っ飛ばされていた。

憶えているのは木刀が粉々に砕ける様子だった。

(C)2012 STUDIO SAIX All Rights Reserved.

「……ちゃん。……トールちゃん。……トールちゃん」
　ゆさゆさと揺すられて目が覚めた。
　もしかしたら本当に夢だったのかもしれないと安堵したのも一瞬、ここはやっぱりあの部屋だった。石棺も見える。
　現実だったんだよな……。でも、白昼夢って事も……なさそうだ。すぐ傍に粉々の木片が散らばっている。
「トールちゃん、大丈夫？」
　心配そうな顔でキヨカが覗き込んでくる。
「あ、ああ……」
　ゆっくりと身体を起こす。
「いてて……」
　なんだか節々が痛い。
「ホントに大丈夫？」
　あのキヨカが背中に手を当てて支えてくれる。
　うわっ。あのキヨカが親切だ……などと驚く余裕もない。
　いてて……と首をさする。
　それにしても、なにかよくわからないヤツに思いっきり吹っ飛ばされて、壁に叩きつけられた。ヘルメットがなかったら死んでたかもしれないぞ……って、そういやあいつはどこ行った？つうか、どうなったんだ？
　キョロキョロと周囲を見ていると、
「あの変なのなら消えたよ」
　と、キヨカが言った。
　消えた……？
　その言葉を理解するのに数秒を要した。
「消えたってどういう事だ？」
「い、痛いよ、トールちゃん」
　はっとキヨカの肩の手を離す。どうやら、無意識に掴んでいて、しかもかなりの力をこめていたようだ。
「もう……順番に話すから」
「ああ、頼む」

　キヨカが言うには、あの石棺の中から出てきた黒いヤツは、俺を吹っ飛ばした後、キヨカに触覚を向けて調べるような行動をしたそうだ。
　自分も襲われる……と覚悟したそうなのだが、黒いヤツはそのまま消えたのだそうだ。
　そう――空気に溶け込むように消えたらしい。

　で、俺が心配で起こしてくれたそうだ。
「なあ、あれってなんなのか知ってるか？」
　キヨカは、知るわけないでしょ、と首を振った。
　だよな……。
「ねぇ、帰ろう……」
　珍しくキヨカの声が弱々しかった。まあ、あんな事があったんだし当然か。
「……そうだな」
　とにかく、この事はじいさんに言っておくべきだろうな。あのじいさんならなにか知っているかもしれないし……。
「ちなみにね、あの中は空っぽだったよ」
「……」
　こんな状況でも石棺の中身を確認していたのか……言葉出ないよ、キヨカ。すごすぎるぜ。
　しかし……石棺の中が空という事は、中身はあの黒いヤツだったという事になるんだろうか。トレジャーハンターが昔に盗んでいた……とは考えられないよな。だって、開かなかったんだから。
　地面に落ちている蓋を見て思った。
　つまり……俺たちって、なにか封印されていたものを復活させちゃったとか？　マジで？
　そんなんあり？
　とにかく、今は戻るしか……って、めっちゃ身体が痛くて動けない。筋肉痛とかいうレベルじゃないな、これ。

(C)2012 STUDIO SAIX All Rights Reserved.

　キヨカに肩を貸してもらい、あの長い通路を歩き、山を下り、遠野家まで戻ってくる頃には日が変わっていた。
　言うまでもないが、じいさんにボコボコに殴られた。怪我人に対しての仕打ちか、それが。無傷の時でも反撃できないのに、こんな状態では不可能だ。されるがままだった。
　そのくせ、そのすぐ後にやたらと真剣な顔になって、なにがあったのか訊くもんだから調子狂う。すっかり毒気を抜かれた感じだ。
　俺とキヨカは見たままを話した。隠すような事じゃないし、なにか大変な事が起こっているわけだからな。悪戯っ子が自分の悪戯を隠すような事をするわけにもいかない。
　それを聞いたじいさんは、おもむろに一巻きの巻物を広げた。
　そこには、化け物……というか、怪物のようなものが闘っている絵が描かれていた。その脇には、刀を持った人も描かれている。
「おじいちゃん、これってなに？」
　その疑問を口にしたのはキヨカだった。俺はあの時の痛みとじいさんに殴られた痛みでそんな元気もない。
「これはな、昔この世界を……いや、あらゆる世界を暴れた蟲(ベステート)を退治したという絵なんじゃ」
「おじいちゃん、べすてーとってなに？」
　キヨカが即座に訊く。
「蟲(ベステート)とは、この絵のこいつらのようなものの事じゃ。その名の通り蟲(むし)じゃな」
　虫？　虫って……。
「昆虫みたいな？」
　そうそう。さすがキヨカ。俺の訊きたい事を訊いてくれる。つうか、誰でも疑問に思うけどな。
「そんなもんじゃな。ただ、大きさは昆虫とは比べようもなく、さらにはその性質も異なるらしい。詳細はわからんのだが、ここにはそう書いてあった」
　と、和綴じの本を出した。
「ここに書かれていたのは、大まかな事だけじゃ。昔、一組の男女が四刀(しとう)を用(もち)い、門番(ポーディスト)の蜘蛛(アラネーオ)を操り蟲(ベステート)を封印した……というくらいじゃ」
　しとう？　ぽーでぃすと？　あらねーお？
　さっぱりわからん。すまんがわかる言葉で頼む。
「おじいちゃん、全然わかんない」
　キヨカは少しご立腹のようだ。
「すまんのぅ。そうじゃな、若いもんは知らんのじゃったな。わしとて、キヨカには知らせずにおったからなぁ」
　と、感慨深そうに遠くを見るじいさん。

「わしとて、御伽噺のようにしか思っておらんかったからな……。この逢稀(あき)におりながらこうだとは……我ながら愚かしい。詩稀(しき)を知っておれば御伽噺などと思うはずもないのにな」
　なんだか自分の世界で話しているんだが……。俺もキヨカも全然わからない。
「すまん、独り言じゃ。で、なんだったか。どこから話そうかのぅ」
「おじいちゃん、最初から話して終わりでやめるの」
「そうじゃな……。最初という事は、この村の存在意義からかのぅ」
　そんなとこから始まるのか。そのべ……なんとかじゃないんだな。
「この村はな、詩稀を守護及びその存在を秘匿(ひとく)にするために存在しておったのじゃ。といっても、これは歴史の教科書で習うような、なんとか時代――それこそ、江戸時代やその前くらいの話じゃ。前後するが、この巻物はそれよりももっと昔のものじゃ」
　しかし、江戸時代とか言われても実感ないよな。しかも、この巻物はそれより前だろ？　まさに絵空事って感じだな。目の前にそれがあるってのにな。
「それほど昔より、この逢稀には四刀のうちの一振り〝風伯(ふうはく)〟という刀が伝わっておる。ここに描かれているのがおそらくそれじゃろう。わしも他のものに関しては知らないんじゃ」
　いわゆる伝説の刀ってヤツか？　そんなもんがあったとはな。
「そして門番(ポーディスト)とは、この蜘蛛(くも)のようなヤツの事じゃ。蟲(ベステート)を捕らえるものだと聞いておる」
　俺なりに解釈すると、べ……なんとかを捕まえるために伝説の刀で闘った人がいて、その人の使い魔がアラ……なんとかってわけか。それでいいのか？
「それで……私たちってもしかしてその蟲(ベステート)を復活させちゃったってわけ？」
「そうなる」
　じいさんはゆっくりと頷いた。
　マジかよ。なんだか大変な事をしでかしてしまったんじゃないか。こんなに落ち着いてていいのか？
「じゃあ、大変じゃない。どうするの？」
「なんともできん。少なくともわしにはなにも、な。だが……」
　じいさんはそこで言葉を切って俺たちを交互に見た。
「あれを復活させたという事は、お前たちになにかしらの力があるとみていいじゃろう。解放してしまったのはお前たちじゃ。なんとかせい」
「「……」」
　俺たちは言葉を失った。
　なんか全責任を押し付けられた。あながち間違ってもないんだけど。確かに俺たちが開けてしまったんだけど……もうちょっとフォローしてくれてもよくない？
「それにしても、公恵さんのあれが本当に言葉通り蟲(むし)だったとはな……」
　一人で納得したじいさんは、さて今日はもう遅いし寝るか、と部屋を出て行こうとした。
「あ、おい……」
「そうじゃった。莫迦弟子よ、明日から特訓じゃ」

　引き止めようとした言葉を遮られ、しかもなにか宣言されたんですけど。
「今のわしらにはなにもできん。それに、疲れた状態ではなにもいい事はない。休息も大事じゃぞ」
　そう言い残すと自室へと向かった。
　残された俺とキヨカは、お互いをじっと見たままどうしようかと考えていたが、どうしていいのかわかるはずもないので、じいさんの言うとおりに眠る事にした。
　しかし、身体はボロボロで疲れきっているはずなのに、神経は高ぶっているのか、なかなか寝付けなかった。

(C)2012 STUDIO SAIX All Rights Reserved.

心の歌を奏でて　ー序章ー　①

http://p.booklog.jp/book/48881

著者：芳田尚哉
著者プロフィール：http://p.booklog.jp/users/studiosaix/profile

感想はこちらのコメントへ
http://p.booklog.jp/book/48881

ブクログ本棚へ入れる
http://booklog.jp/item/3/48881

電子書籍プラットフォーム：ブクログのパブー（http://p.booklog.jp/）
運営会社：株式会社paperboy&co.